評論「政治権力者ヤン・ウェンリーに関する一考察」

旧王朝史編纂所教授

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

本作は「ヤン・ウェンリーとは何者であったのか?」を主題として、原作中のヤンの言動と、原作記述との整合性を図ろうとする小論文です。

原作中、ヤンの言動には矛盾が多いと感じていました。例えば、戦争を嫌悪し、平和を希求する為人だと強調されながら、バーミリオン星域会戦後、将来の武力蜂起の核として自艦隊の一部を隠匿したり、「ペンは剣よりも強し」を真理だと称揚する反面、皇帝ラインハルト率いる帝国軍と一戦し、その戦果を以て、ラインハルトから譲歩を引き出し、民主共和制を掲げる自治領の設立を構想するなど、民主思想を喧伝する言論活動よりも、直接的な武力行使を選んでいます。

また、これは時代背景を考えるとやむを得ない面もありますが、ヤン艦隊によるイゼルローン要塞の無血攻略は、ご都合主義的でリアリティがないと感じます。星間戦争も可能なほどテクノロジーが発達しているのに、要塞のセキュリティは無いに等しいからです。作中では「どれほど進んだハードウェアでも、それを運用するのは人」と主張されており、それは真理だと思いますが、やはりちぐはぐな印象は否めません。

これらの矛盾（敢えて失礼な表現をすれば「原作設定の不備」）に、筆者なりの整合性を与えたいと考察していった結果、ヤンという人物は温和な好青年などではなく、オーベルシュタイン以上に冷徹で、ルビンスキーやド・ウィリエ以上の謀略家で、自身の政略達成のためな

ら、あのトリューニヒトと握手する事さえ辞さない、極めつけのマキャベリストとなりました。

これは殊更にヤンを貶めようと意図した訳ではなく、筆者なりにヤンの言動と原作記述との整合性を図ろうとした結果です。原作通りのヤン像を好む方には不快な記述が多数ありますので、本作の閲覧はお勧めしません。敢えて閲覧される場合は、自己責任でお願い致します。

なお、本作では同盟軍内の派閥抗争が大きなウェイトを占めていますが、これは銀英伝二次創作の傑作、甘蜜柑氏の作品「エル・ファシルの逃亡者」から得た着想です。原作世界に対する氏の分析は非常に鋭く、筆者もその見解に多大な影響を受けています。銀英伝ファンで未読の方には是非、一読をお勧め致します。

本作は拙作「ゴールデンバウム朝銀河帝国史」の設定を用いており、本文中の「ミンツ氏の著作（諸著作）」は、原作及び原作記述を指します。らいとすたっふルール２０１５年改訂版にしたがって作成されています。

目　次

はじめに ―――― 1
第１節　政治権力に庇護されていたヤン・ウェンリー ―――― 5
第２節　同盟末期の軍内二大派閥～シトレ派とロボス派 ―――― 8
第３節　同盟軍史に見る両派の抗争 ―――― 11
第４節　アスターテ星域会戦の影響～同盟軍は敗北、シトレ派は勝利 ―――― 15
第５節　トリューニヒトは支持されていなかった？～エドワーズ女史が明かした真実 ―――― 18
第６節　帝国領侵攻作戦は何故、実行されたのか？ ―――― 22
第７節　政治的軍人ドワイト・グリーンヒル～ヤンとフレデリカは「政略結婚」？ ―――― 26
第８節　帝国領侵攻作戦の「裏面」～シドニー・シトレの陰謀 ―――― 31
第９節　国防委員長トリューニヒトは何故、出兵に反対したのか？ ―――― 35
第１０節　議長サンフォードと国防委員長トリューニヒトの密約 ―――― 40
第１１節　イゼルローン要塞攻略戦①～ブレーメン型軽巡洋艦の謎 ―――― 45
第１２節　イゼルローン要塞攻略戦②～フォン・ラーケン少佐の謎 ―――― 49
第１３節　イゼルローン要塞攻略戦③～ブラウンシュヴァイク公爵家の影 ―――― 54
第１４節　異説・ヤンは冷徹なマキャベリストだった？ ―――― 61

第１５節　ビュコックに求めた命令書の謎 ―――――― 68
第１６節　イゼルローン要塞司令官は「パエッタ・ドーソン」コンビが適任？ ―――――― 73
第１７節　ヤンとトリューニヒトの秘密同盟～ヤンがイゼルローン要塞を欲した理由 ―――――― 78

はじめに

ヤン・ウェンリーとは何者であったのか？

近年、旧王朝末期の政治史、また同盟・フェザーン史の歴史学会に参加するたび、しばしば耳にするようになった疑問の声だ。理由は明らかだろう。バーラト自治領で、同盟末期の政治、軍事を中心に、刺激的な論考を発表している在野の歴史学者、ユリアン・ミンツ氏の諸著作の帝国語版が多数、発刊されたからに違いない。

筆者のように、帝国暦元年から１００年頃の政治史、ルドルフ大帝や強堅帝ジギスムント1世の御代を扱っている者からすれば、その史料の豊富さに羨望の念を禁じ得ないと同時に、史料情報と伝聞情報が交錯し、厳密なテキストクリティーク（史料批判）も為されないまま、歴史像を描き出そうとするその試みは、歴史学者の仕事と言うよりも、むしろジャーナリスティックな営為に過ぎると思えるのだが。

それはさておき、我々帝国人には馴染みが薄い、同盟やフェザーン末期の現状をリアリスティックに描き出してくれた、これら一連の著作は、筆者も興味深く拝読した。自身も当事者でありながら、出来得る限りの客観性を保とうとする執筆姿勢は好感が持てるが、同時に、旧同盟軍人ヤン・ウェンリーなる人物に対した時のみ、その客観性は失われているように感じる。ヤンが開祖ラインハルト陛下さえ凌ぐ卓絶した名将であり、また民主共和制を護持する事に身命を捧げ尽くした無私の英雄だったと、それのみが繰り返し語られているかのようだ。

ミンツ氏の経歴を考えれば、それも止む無しかとは拝察するが、筆者がミンツ氏の仕事を「ジャーナリスティック」と評したのは、実はこの点にもあるのだ。

さて、ミンツ氏の諸著作に対する評価や批判は、当該時代を専攻する研究者から多数、発表される事が十分予想される以上―実は、筆者の同僚の中にも、ミンツ氏の著作を題材にした論文執筆を予定している者は少なくない―、専門外の筆者が軽々に言及する事は、学界のマナー上からも控えるべきであろう。

ただ、筆者がミンツ氏の著作を拝読する中で、強烈な違和感を覚えた箇所がある。それは以下の点だ。氏の著作の一節より引用したい。

「宇宙暦７９６年（帝国暦４８７年）、ローエングラム朝銀河帝国の建国者、獅子帝ラインハルト陛下がブラウンシュヴァイク公オットーを盟主とする門閥貴族軍を撃滅した、いわゆるリップシュタット戦役前夜、遠く同盟の地で、ヤン・ウェンリーはゴールデンバウム朝銀河帝国を滅亡に導く、必勝の策を練っていた。それも２つ。

１つは門閥貴族軍と同盟して、共にラインハルト陛下の軍を打ち破る、返す一撃で門閥貴族軍を屠る。もう１つは門閥貴族軍に策を授けて、ラインハルト陛下と互角に戦わせ、両軍が疲弊の極に達した所を撃つ。

自分になら多分できる…ヤンの用兵家としての卓絶した頭脳がそう自負するのだ。彼がそれ以前に、そして、それ以降に挙げ続けた、偉大な軍事的業績を念頭に置く時、客観的に見ても、それは完全に正しい評価だった。

しかし、ヤンはその死に至るまで、民主共和国家の一軍人である、との姿勢を決して崩さなかった。それは政治権力に近づく事を良しとせず、権力者に美よりも醜を感じる、彼自身の精神的高潔さを表すと同時に、自身がその卓絶した政戦両略の才能を十全に発揮してしまえば、それは自ずと、民主国家の一軍人に許された矩を超えてしまう。ヤンの明晰な知性は、その事もまた理解していたのだ。

高潔な民主主義者ヤンは、自分は決して、民主国家の醜悪な裏切者、ルドルフ・フォン・ゴールデンバウムが如き、自己神格化さえも妄想した権力亡者にはならないと、固く決意していた。そして、その誓いは、決して違背される事は無かったのである」

ヤン及びルドルフ大帝へのミンツ氏の評価は別として、まず筆者が指摘したいのは、リップシュタット戦役勃発前、旧同盟軍人ヤン・ウェンリーがブラウンシュヴァイク公ら旧王朝の門閥貴族に対し、軍事指導を行える立場にいた事、そして、あの高慢なる貴族達がその指導を受け入れると確信していた事、この２点である。

旧王朝末期、ブラウンシュヴァイク公ら門閥貴族とフェザーン自治

領が経済的に深い関係にあった事は分かっているが、彼ら貴族と同盟政府及び同盟軍との関係が如何なるものであったのか、リップシュタット戦役で当事者の貴族達が悉く滅亡し、また政治的理由で、彼らの史的研究が進んでいない今、明らかになっていない面が多々あるのだが、このミンツ氏の記述は、当時の同盟軍が旧王朝の中枢部と密かな関係を結んでいた事を想像させる。

そして、筆者が感じた違和感とは、ヤン・ウェンリーという人物の政治力の有無である。引用した一節もそうだが、ミンツ氏は自著の中で、ヤンが政治権力者との交際を拒み、その死に至るまで、自身が権力者になる事を一貫して拒否し続けたと強調している。

しかし、敵国の支配層とコンタクトを取れる、さらに自分の意図した通りに行動させられると確信するためには、自分自身が大国の元首クラスの政治権力を保有しているか、或いは自身が元首クラスの権力者に強い影響力を及ぼせる立場でなければ不可能だろう。ミンツ氏の表現を借りるならば、「明晰な知性」の持ち主・ヤン・ウェンリーが、何の確信も目算も無く、敵国の有力者を自家薬籠中の物として、意のままに行動させられると断言するはずは無いだろう。そうでなければ、ヤンは単なる誇大妄想狂でしかなく、そのような極めつけの愚者を偉大なる開祖ラインハルト陛下が好敵手と見なすはずもないからだ。

また、常識的に考えても、一国の軍隊で元帥の地位に至った人物が、政治権力と全くの没交渉でいられるものだろうか、強い疑問を感じざるを得ない。

旧王朝末期は、筆者には専門外の時代であるため、史料上の根拠を示した上での詳細な論証は困難だが、現在の職場・旧王朝史編纂所はその性格上、当該時代の一次史料は比較的潤沢にあり、同時代を専門とする同僚達も多い。さらに、旧同盟軍第7艦隊司令官だったカレル・ホーウッド元中将の知遇を得たため、同盟末期の同軍内部の事情、特に派閥抗争に関しては、数多くの貴重な証言を頂く事が出来た。

それらに基づき、旧同盟軍人ヤン・ウェンリーと政治権力の関係について、ヤンの人生行路に沿って、小論をまとめてみた。今後の同盟

史研究の一助になれば幸いである。また、小論内の同盟及びフェザーン関係の記述は、その多くをミンツ氏の諸著作に負っている。氏の御労苦に対して、同じ歴史学徒として敬意を表するものである事を明記させて頂く。

第1節　政治権力に庇護されていたヤン・ウェンリー

ヤン・ウェンリーの父タイロンは、独立した交易商人だったと伝えられる。その事業は同盟領内に止まらず、フェザーン自治領の企業、商人とも取引していた形跡があり、或いはフェザーン経由で、旧帝国とも何らかの接触を持っていた可能性もあるが、詳細は不明。

しかし、自身が所有する宇宙船の核融合炉事故でタイロンが死亡した後、彼の交易会社は事業継続が不可能となり、また個人的に収集していた古美術品等も全て贋作であった事が判明、遺児ウェンリーは、無償で歴史学を専攻できる学校として、国防軍士官学校戦史研究科に入学している。

同じ歴史学を志した者として、ヤンの向学心には敬意を払うものだが、小論の主題において重要な点は、ヤンの生家は、同盟政府や同盟軍に強い影響力を有する有力家ではなかった事、そして、士官学校入学時のヤンは、他者に影響を及ぼせる経済的能力も皆無であった事、この2点である。当時のヤン・ウェンリーは、ただの貧乏な一青年に過ぎなかった。

ただ、士官学校時代の一挿話で、当時の学校長、後の統合作戦本部長、シドニー・シトレ元帥と個人的な知遇を得た事実だけは強調しておきたい。ヤンが所属する戦史研究科が予算不足の影響で閉鎖される事が決まった際のエピソードなのだが、この時、ヤンがシトレと面識を得た事は、政治権力者ヤン・ウェンリーを語る上で、極めて重要な意味を持っている。

転機となったのは、帝国暦４７９年（宇宙暦７８８年、以下カッコ内の年数は宇宙暦）、帝国軍の攻勢によって奪還されたエル・ファシル星系から、約３００万人の非戦闘員を無事に脱出させるとの功績を上げ、いわゆる「エル・ファシルの英雄」となった事だろう。

ミンツ氏の著作によれば、当時のヤンは、同盟世論の圧倒的な賞賛の渦中に置かれ、軍上層部は本来、生者には許されない二階級特進（中尉から少佐）を敢えて行い、氏の表現を借りるなら「流星雨のごとき賛辞を浴びせた」のである。

ミンツ氏の著作によると、ヤンの士官学校時代の先輩で、後にヤンの有力な幕僚の1人となるアレックス・キャゼルヌは、当時のヤンの立場を「お前さんは功績を立てすぎたんだ。で、お前さんのあたらしい処遇が、にわかには決まらない。各部署の調整にも時間がかかる」と説明しているが、この時、同盟軍の中堅士官として、統合作戦本部に勤務していたホーウッド元中将は、当時の同盟軍内部、特に各派閥の動きを「有望な新人をどこが獲得するか、水面下で激烈な闘争が繰り広げられていた」と語っている。

これもホーウッド元中将に教示された事だが、民主国家の軍隊である同盟軍は、有権者にして納税者である市民の意向、そして彼らに選挙で選ばれた政治家の意向を軽視する事は出来なかった。同盟軍に求められていたのは、悪辣な侵略者と非難していた旧帝国軍の侵攻から祖国を防衛し、市民の生命と財産を守護する事だった。

故に、守護すべき市民を軍高官が見捨てて、自分一人だけ逃亡したエル・ファシルの件は、同盟軍にとって最大級の醜聞であり、この状態を放置しておけば、市民の激烈な批判に晒され、次年度以降の予算獲得に苦労するどころか、兵員への志願者数にも悪影響を与えかねない。だからこそ、民間人を無事、救出したヤンを殊更に称揚する必要があったのだが、舞台を同盟軍内に限れば、英雄として祭り上げたヤンをどの部署が獲得するのか、まだ派閥色がついていない有望な新人をどこの派閥が囲い込むのか、高級軍人たちにとって重要なのは、将にこの点だった。

市民が称賛する英雄ヤンを獲得できれば、選挙時の集票要員—有体に言えば、美男美女の芸能人やミュージシャンらと同じ—として、自派閥に近い政治家に「貸し出す」事が出来る上、その政治家が属する政党に大量得票を見込める有望な新人が居なければ、ヤンに因果を含めて、選挙に立候補させる事もできる。そうすれば、政治家や政党に貸しを作れて、今後の予算獲得に便宜を図ってもらえる、それは自派閥が同盟軍内の派閥闘争を勝ち抜いていく上で、有効な武器となる…こういう思考を巡らせなかった高級軍人は当時、恐らく存在しなかっただろう、というのがホーウッド元中将の見解である。確かに、ミン

ツ氏の著作にも、キャゼルヌの想像として、ヤンが政界進出を求められるのではないか、との記述がある。

だが、その後のヤンの人生を見るに、この予想は完全に外れている。ヤンは短期間の捕虜収容所勤務を除けば、ほぼ一貫して宇宙艦隊所属の参謀として勤務、前線に出れば2回に1回は奇功を立てたと言われ、若干２９歳で准将に昇進している。これは帝国軍士官学校卒で貴族身分を持つ軍人と比較しても、異常に早い昇進速度だった。

さらに、ホーウッド元中将は、以下の通り証言している。

「当時の同盟は戦時下であったため、前線勤務の士官は確かに昇進が早かった。しかし、退職金や年金受給の関係上、退役間近の佐官をごく短期間だけ、准将に昇進させて退役させる人事慣行があったので、准将の階級は５０～６０代の軍人が多数を占めていた。ただ軍功だけで２０代のうちに准将になれる事は、まずあり得ない。

当時、ヤン元帥を始め、例えばアンドリュー・フォークやウィレム・ホーランドといった、２０代中に准将に昇進した若手士官は、例外なく自派閥の強力な後押しがあったから昇進できたのだと、同盟軍中では専らの噂だった。私自身も、当時はシトレ派に属していたのだが、ヤン元帥は派閥の領袖・シトレ元帥の秘蔵っ子で、同派のプリンス的存在だった。

私は元帥の養子になったという、このミンツなる人物と面識はないのだが、養父の何を見ていたのだろうか、ヤン元帥は政治権力と一切関わりを持とうとしなかったと書いているが、私が知る限りで、ヤン元帥ほど、政治権力によって庇護され、その力を得て出世の階段を駆け上がった同盟軍人は稀なのだが」と、ミンツ氏の主張とは正反対の評価を下している。

筆者には、このホーウッド元中将の指摘にこそ、ヤン・ウェンリーが旧王朝の門閥貴族に作戦指導を行える、その指示の下、彼らを行動させられると確信できた理由が存在するように考えている。

次節では、ヤンと政治権力との関わりを考察するに当たり、その前提となる、当時の同盟軍中の派閥の実態について、まとめてみたい。

第2節　同盟末期の軍内二大派閥～シトレ派とロボス派

ヤン・ウエンリーがシトレ派、その領袖、シドニー・シトレ元帥の庇護下にあり、同派のプリンス的存在だったという、ホーウッド元中将の証言を検証する前に、そのシトレ派、その対立派閥だったロボス派の実態について、同中将ほか、当時の同盟軍をよく知る人物の証言、また当時の公文書等に基づく先行研究に基づき、簡単に概説しておきたい。

まず、ヤンも属したと見られるシトレ派は、かのアムリッツァ星域会戦時の統合作戦本部長、シドニー・シトレ元帥を領袖とするグループである。

同派に属する有力な軍人は、同会戦時の総参謀長ドワイト・グリーンヒル、マル・アデッタ星域会戦で同盟軍を率いたアレクサンドル・ビュコックとチュン・ウー・チェン、アムリッツァ星域会戦で戦死したウランフやボロディン、またヤンの幕僚を務めたキャゼルヌ、ムライ、パトリチェフ、フィッシャーなど。そして、同派との関係が深かった政治家として、最後の最高評議会議長ジョアン・レベロ、その友人で、人的資源委員長を務めたホワン・ルイなどが存在する。

同派の軍人達は、政治と軍事は対等であるべき、という思想の持ち主だった。シビリアンコントロールを否定するものではないが、国防は政府と軍隊とが対等の立場で協議し、和戦の可否を含めて検討、決定すべきと考えていた。

ただ、彼らの中にも温度差はあり、派閥領袖のシトレ、その御曹司的存在のヤンは、軍事力の存在は否定しないが、その行使には慎重であるべきで、勝算の無い戦争はすべきではないとの立場だった。

一方、政治が誤った方向に進もうとしている時は、武力行使をしてでも、軍事がそれを正すべきだと考える軍人も多く、彼らの中心人物はドワイト・グリーンヒルだった。彼が後年、腐敗した同盟政府を打倒し、対帝国戦争の完遂を掲げる救国軍事会議の議長に推されたのは

決して偶然ではない。
また、グリーンヒルはシトレ派の要人でありつつも、敵対派閥・ロボス派とも円滑な関係を維持し、同派領袖のラザール・ロボス元帥の下で、しばしば総参謀長を務めている。「当時の高級軍人の中で、最も政治的な軍人」とは、ホーウッド元中将の評価である。
彼らは総じて軍人特有の潔癖さを持ち、理想主義的な傾向が強かった。現実主義の名の下、政治家と取引、妥協する事を嫌い、彼らと交際する事さえ敬遠する者も少なくなかった。ヤンはその中の最右翼で、同派領袖シトレ、その腹心的存在だったキャゼルヌから、しばしば苦言を呈されている。
彼らシトレ派に対抗した、もう1つの派閥が、アムリッツァ星域会戦時、同盟軍総司令官を務めた、当時の宇宙艦隊司令長官ラザール・ロボス元帥を領袖とするロボス派だ。
同派に属する有力軍人は、バーラトの和約時の統合作戦本部長ドーソン、同盟最後の同本部長ロックウェル、アムリッツァ星域会戦時の作戦参謀で、敗戦の戦犯と見なされているフォークや、開祖ラインハルト陛下との艦隊戦で敗死したホーランド、またアスターテ星域会戦でラインハルト陛下に敗れたパエッタ、パストーレ、ムーアらがいる。
また、同派に接近していた政治家は、バーラトの和約時の最高評議会議長ヨブ・トリューニヒト、同盟政界で彼の派閥に属しており、国防委員長を務めたネグロポンティやアイランズ達が代表的な人物だ。
同派の軍人達は、シトレ派とは異なり、シビリアンコントロールの原則を墨守、軍事は政治にあらゆる面で従属すべきであると主張した。彼らからすれば、シトレ派の軍人達は、自由惑星同盟という国家の中に、同盟軍というもう一つの国家、即ち「国家内国家」を作る事を目指す、民主国家の軍人にあるまじき事を目指す危険分子だった。実際、彼らの中から、クーデター勢力・救国軍事会議が生まれた事を考えると、後世からの視点ではあるが、ロボス派の懸念は決して杞憂ではなかったと言えるだろう。
彼らの主張は、戦時下である事を理由に、軍隊の独走を恐れる政治家や政府官僚、また軍隊が政権を掌握すれば、国家社会主義の名の下、

私有財産を没収されるのではと恐れた企業経営者から支持された。
だが同時に、彼ら同派の軍人は、政治家らと結び、利権漁りや猟官運動に精を出す者も少なくなく、公人たる者、清廉さが必要と考える政治家は、彼らロボス派の主張を心中では是としながらも、金と権力を貪る姿勢に我慢ならず、主張には賛同できないが、清廉さに惹かれて、シトレ派と誼を結ぶ者もいた。
その典型がジョアン・レベロだった。彼は同派幹部で、最後の宇宙艦隊司令長官ビュコック元帥と親しく、シトレ派とは比較的、良好な関係を維持していたが、その主張には決して賛同していなかった。これもミンツ氏の著作にあるが、氏はレベロがヤンを評して、第二のルドルフになるのではとの懸念を表明していた事に対し、ヤンという人物を全く理解していなかった証左だと論難しているが、ヤンとグリーンヒルが同派閥に属していた事を念頭に置くなら、レベロの懸念はむしろ当然と言えよう。

第３節　同盟軍史に見る両派の抗争

前節の内容を踏まえて、同盟末期、帝国暦４８３～４８７（７９２～７９６）年に起こった主要な会戦について、同派の動向を念頭に置きつつ、分析してみたい。

まず、以下に略年表を示す。カッコ外の記述が史料等から確認できる史実、カッコ内記述が筆者の評価である。

帝国暦４８３（７９２）年　第５次イゼルローン要塞攻防戦

宇宙艦隊司令長官シドニー・シトレが遠征軍総司令官を務める。要塞攻略は出来なかったが、シトレの指揮で、並行追撃による「雷神の鎚」の無力化と、無人艦作戦が実施される。

（用兵家としてのシトレの名声が確立）

帝国暦４８５（７９４）年　第６次イゼルローン要塞攻防戦

ラザール・ロボス元帥が遠征軍総司令官を務める。ロボス派の有力な一員、ホーランド少将が活躍するも、善戦したにとどまり、全軍撤退を余儀なくされる。

（用兵家としてのロボスの名声が低下）

帝国暦４８６（７９５）年　第３次ティアマト星域会戦

帝国皇帝フリードリヒ４世の在位三十周年を記念、国威発揚のため、宇宙艦隊司令長官ミュッケンベルガー元帥率いる帝国軍が同盟領に侵攻。迎撃軍総司令官はラザール・ロボス元帥が務めるが、後方で待機している間に、両軍は開戦してしまう。

迎撃の指揮はビュコック・ウランフ・ホーランドの三中将が務めたが、戦理を無視した用兵でホーランドのみ敗死、同盟軍撤退の原因となるが、残るビュコック・ウランフ両提督の奮戦で全軍崩壊の危機は脱する

（ロボス派の有力な一員だったホーランドの戦死で、同派の幹部級軍人が失われた。反面、シトレ派のビュコック・ウランフ両将の名声が上がり、シトレ派の評価も高まる）

同年　第４次ティアマト星域会戦

第３次と同様、ミュッケンベルガー元帥率いる帝国軍と、ロボス元

帥率いる同盟軍とが激突。惑星レグニツァでの遭遇戦で、パエッタ中将麾下の同盟軍がラインハルト陛下率いる帝国軍に敗退している。

続く本戦でも、敵前回頭という大胆な戦術を実行したラインハルト陛下によって、同盟軍は撤退を余儀なくされている。同盟軍は侵略する帝国軍を退けるとの戦略目的を達成するも、勝利を得たとは言い難い。

（第３次・第４次と、ロボス指揮の同盟軍が敗退、また撤退した事で、用兵家としてのロボスの評価はさらに低下。また、ロボス派のパエッタ中将も敗軍の将との不名誉を負う）

全体的な傾向として、ロボス元帥以下、ロボス派に属する提督たちの失態が目立つ。逆に、シトレ派は、領袖シトレが第５次イゼルローン要塞攻防戦で、攻略こそ出来なかったものの、彼が立案、実行した並行追撃と無人艦作戦は、要塞攻略戦術の極北に近いとも見なされ、その独創性と戦術指揮能力を評価された結果、元帥への昇進を果たしている。また、ビュコック・ウランフら、同派の軍人達も勝利を得て、名声を高めている。

つまり、帝国暦４８３～４８７（７９２～７９６）年の間、当時の同盟軍の二大派閥、シトレ派とロボス派は、帝国軍との戦闘で勝利、または評価するに足る武勲を挙げたシトレ派が相対的に優位で、同じ元帥位でありながら、制服軍人トップの地位たる統合作戦本部長に、ロボスに先んじてシトレが就任できたのも、勝利を背景とした世論の支持、その世論に迎合した政治家の判断があったのではないかと推測される。

統合作戦本部長時代のシトレは、ロボス派に近い国防委員長トリューニヒトとは決して良好な仲ではなく、これもミンツ氏の著作の記述だが「よく言って武装中立というところ」だった。

だが同時に、本部長シトレは「はでな人気こそないが、支持者の層は厚く広い」とも評されている。当時のトリューニヒトは、その熱狂的な反帝国演説と端正な容姿で、多くの有権者の支持を集めており、そのトリューニヒトと不仲であったにも関わらず、シトレ支持者が多かったという事実は、シトレが軍内にとどまらず、政界、官界、経済

界、そして一般世論の中で、反トリューニヒト派の支持を集めていたのではないかと推測される。

詳しくは後述するが、アスターテ星域会戦での同盟軍の敗北、そしてヤンによる第7次イゼルローン要塞攻防戦の勝利で、本部長シドニー・シトレの名声と権威は頂点に達している。

そして、本論との関係で重要なのは、エル・ファシルの英雄となったヤンは、その軍人キャリアの早い時期から一貫して、末期の同盟軍で重きをなしたシトレ元帥の庇護下に置かれていた可能性が高い事だ。この点を明確に記した史料は、管見の限りでは存在しないが、状況証拠と呼べそうなものはある。

それは帝国暦４８３（７９２）年の第５次イゼルローン要塞攻防戦の開戦前、遠征軍総司令官シトレ大将は、当時弱冠２５歳の少佐で、自身の副官を務めていたヤンをわざわざ指名し、列席の諸提督に対して、攻略作戦の発表をさせている。

これもホーウッド元中将の指摘だが、イゼルローン攻略の如き大作戦の概要説明を行うのは、通常ならば遠征軍の参謀長、もしくは作戦参謀がやるべき事で、一介の副官に任せるような軽い業務ではないとの事。この点から、シトレが如何にヤンを重用していたかが伺えると感じるのは、穿ち過ぎであろうか？

さらに、ヤンの為人から考えてみよう。前述のホーウッド元中将の証言によれば、エル・ファシルの英雄となったヤンに対しては、各派閥から様々なアプローチがあった事は十分想像されるが、その際、ヤンはシトレ派以外の勧誘に耳を貸すだろうか？

ミンツ氏の著作によると、ヤンの対人関係は「嫌いな奴に好かれる必要は無い。理解したくない奴に理解される必要は無い」が基本だったそうだが、だとすると、彼の交際相手は「好きで理解できる人」にならざるを得ない。

その時、士官学校時代に面識があり、その裁定に感謝もしていた当時の校長シトレ、そして、やはり当時の士官学校事務局次長で、頼りがいがある先輩だったキャゼルヌ、この２人に勧誘されたなら、ヤンがそれを拒絶する事は出来ただろうか。いや、軍内に知己が少なかっ

たヤンには、一面識もないロボス派の軍人にどれほど口説かれても、士官学校時代からの知り合いで、かつ世話になった人の言葉以上に、その説得が心に響く事はあり得なかっただろうと想像される。

実際、ヤンは一貫して彼ら2人に対し、礼節を以て接している事は、ミンツ氏の著作から十分に読み取れるのだ。

つまり、エル・ファシルの英雄となったヤンは、その後ほどなくして、シトレ派に所属。以降、同派領袖シトレ、その腹心的立場のキャゼルヌの庇護を受け、その卓越した軍事的才能を見込まれた結果、次第に領袖シトレの秘蔵っ子、同派のプリンス的存在になっていった。そのため、彼は軍隊というタテ社会の中でも、理不尽、または非道な目に遭うことなく、その才能を伸び伸びと発揮し、かつその武勲を正当に（或いは過大に）評価された結果、まずあり得ない２０代での准将に昇進できた、これが筆者の着想である。

それは、ロボス派に属したホーランドやフォークが派閥の後押しを受けて、ヤンと同様に２０代で准将の地位に到達した事、さらには、開祖ラインハルト陛下が姉君グリューネワルト大公妃殿下、そして旧王朝の皇帝フリードリヒ４世の庇護を受けて、若年から出世の階梯を駆け上がった事と軌を一にしており、その意味で、ホーウッド元中将は「ヤン元帥ほど政治権力に庇護され、出世の階段を駆け上がった同盟軍人は稀だ」と評したのではないかと考えられる。

第４節　アスターテ星域会戦の影響～同盟軍は敗北、シトレ派は勝利

シトレ派のプリンス的存在として、順調に出世してきたヤンが、エル・ファシルに続き、再び同盟社会の英雄、ヒーローとなったのは、言わずと知れた第７次イゼルローン要塞攻防戦での無血陥落、そしてそれに先立つ、アスターテ星域会戦での同盟軍惨敗を阻止した事の立役者になったから、である。

ミンツ氏の著作では、上記２つの戦闘で勝利したのは、ただヤン・ウェンリー１人だけである、とも言いたげな記述になっているが、ホーウッド元中将らの証言に基づく限りで、同盟軍全体に視野を広げるならば、勝利したのはシトレ派だった。

まず、帝国暦４８７（７９６）年に行われたアスターテ星域会戦。帝国側視点では、開祖ラインハルト陛下が同盟軍の三個艦隊を相手取り、ほぼ完勝を収め、元帥杖と宇宙艦隊副司令長官の地位を手に入れて、後年、帝国最大の権力者となるための基盤を確立した重要な戦いだが、同盟側視点に立つならば、ロボス派の凋落が明らかになり、シトレ派の優位が確立した戦いでもあった。

帝国軍迎撃の任に当たったパエッタ・ムーア・パストーレの三提督は、前述の通り、ロボス派の有力メンバーだった。この時、国防委員長の地位にあったトリューニヒトは、ロボス派に近い自身の立場強化、また同盟軍内の派閥均衡を策して、軍令に対する軍政の相対的な優位を保つため、これまで帝国軍に勝利してきたシトレ派の諸提督を退け、敢えてロボス派の提督のみを起用。また、同盟軍勝利を確実にするため、自身の職権を最大限に使用、帝国軍の二倍近い、三個艦隊の動員を実現させた。

つまり、同星域会戦は、国防との戦略目的だけではなく、第４次ティアマト星域会戦まで失点続きだったロボス派の失地回復、との側面も強かったのだ。

それを具体的に証明する史料は、現時点では発見されてはいない

が、同会戦では、シトレ派のプリンス的存在のヤンが、ロボス派のパエッタ中将の麾下につけられ、かつ露骨に冷遇されている事を考慮するならば、同盟軍勝利の暁に、上官パエッタの見識と手腕を称揚、その反面、部下ヤンの無策ぶりを喧伝する事がロボス派、及びトリューニヒトら同派政治家の目算だったのではないか、と推測される。

だが、現実はロボス派の目算通りには進まなかった。開祖ラインハルト陛下の卓越した戦術指揮能力により、同盟軍三個艦隊はほぼ壊滅、しかもその危機を救い、全軍壊滅の悲劇を防いだのが、この戦いで無策ぶりを露わにしてやりたいと目論んでいたヤンだった事は、同派にとっては、まさに二重の意味で「敗戦」だった。

ホーウッド元中将らの証言によれば、この戦いは確かに同盟軍の敗北だったが、こと同盟軍内の派閥抗争という観点でのみ言えば、シトレ派の「勝利」でもあった。

ビュコック、ウランフ、そしてヤン、優秀で実績もある将帥を政治的理由から起用せず、三個艦隊の事実上の壊滅を招いたロボス派と同派政治家は、軍内部のみならず、政界・官界、そして一般世論の激烈な批判に晒されて、その影響力を急速に低下させた。

一方、自派の諸提督を迎撃軍司令官に推薦しながら、トリューニヒトら国防族議員の反対で実現できなかった統合作戦本部長シトレは、もし彼の推薦通りに、ビュコック提督らが起用されていれば、必ず帝国軍に勝利していたはずだ、そんな世論が巻き起こり、人を見る目がある優秀な組織管理者だと、その声価はさらに上昇した。

また、アスターテの英雄として、同派プリンスであるヤンの存在を称揚する事で、シトレ派の軍人たちの優秀さをも喧伝する事ができ、彼らの起用こそが今後の国防の要である、との世論が醸成するにも至った。

そして、シトレ派はジョアン・レベロ、ホワン・ルイら、同派に近い政治家を動かし、議会内の野党勢力、ひいては反戦派とも結び、その影響力は同盟軍内のみならず、政界や官界、言論界にまで及んでいった。

同派領袖のシトレ、そして、その御曹司的存在のヤン、同派の主流

派が望んでいたのは、軍部主導による銀河帝国との和平、そして相互不可侵条約の締結だった。これもホーウッド元中将の証言なのだが、「当時、ビュコック、ウランフ、そしてキャゼルヌにヤンなど、シトレ元帥に近い軍人達は、帝国との戦闘で一度、圧倒的な勝利を収め、それを交渉材料として、政府ではなく軍部、それもシトレ派が主導して、帝国との間に和平を結ぶ事を考えていた。シトレ元帥がヤンを少将に抜擢して、イゼルローン要塞攻略の指揮を取らせたのは、彼らの政略に基づく行動だったのだ。私自身は主戦派、対帝国強硬派の立場だったので、この頃からシトレ元帥のグループとは距離を置き始め、対帝国戦争の完遂を掲げるグリーンヒル大将のグループに接近していった」と云う。

第５節　トリューニヒトは支持されていなかった？
～エドワーズ女史が明かした真実

ミンツ氏の著作によれば、このアスターテからアムリッツァ星域会戦に至る同盟社会は、恰もトリューニヒトら主戦派政治家の天下だった印象を受けるが、実態は異なっていた。

当時発刊されていた電子新聞等には、主戦派と反戦派の主張が、おおよそ６対４の比率で掲載されている。これは同盟のマスコミ界の慣行なのだそうが、政治関係のニュースを発表する時は、その政治団体（政党など）の規模に応じて、掲載するスペースや、報道される時間などが案分されていた。

この事を念頭に置くなら、末期の同盟社会は、必ずしも主戦派独走の状態では無かったと言えるだろう。さらに、傍証と言えるのが、代表的な主戦派政治家トリューニヒトを衆人環視の前で強烈に批判したと言われるジェシカ・エドワーズが代議員に当選した事実。主戦派が世論を支配していたならば、反戦派の候補、しかも主戦派の代表格たるトリューニヒトを非難、侮辱した反戦派女性に支持が集まるとは思えないのだ。

なお、かのエドワーズ女史が同盟政界に登場する機縁ともなった、アスターテ星域会戦の戦没者慰霊祭の席上、反帝国演説を行う国防委員長トリューニヒトを衆人環視の前で批判した、とのエピソードだが、筆者はこの挿話の実在性を強く疑う者である。

ミンツ氏の著作によれば、慰霊祭にはトリューニヒトのほか、当時の最高評議会議長ロイヤル・サンフォード、また統合作戦本部長シドニー・シトレ元帥も出席している。筆者は同盟の国家式典の実態には明るくないのだが、こと帝国の常識で言えば、国家主催の式典が挙行されている最中、例えうら若き女性であっても、列席者が濫りに席を離れ、主催者側の政府要人、それも国家元首や閣僚級政治家の前まで、制止される事無く歩いていけるなど、万が一にもあり得ない。会場内の各所に佇む警備兵からテロリストと見なされ、即時の拘束は当然、

不穏な動きを見せれば射殺さえあり得る。
たとえ同盟が自由で平等な民主国家であったとしても、テロリストや犯罪者によって、政府要人に危害が加えられないよう、十分な警護が付けられるのは、政体を問わず、国家組織の常識ではないのだろうか。
そして、これもミンツ氏の著作にあるが、約6万人の参列者は、トリューニヒトの反帝国演説に呼応し、氏の表現を借りるなら「理性もどこかへ吹き飛んだ」程に熱狂し、「座席から立ち上がり、奥歯までむき出してトリューニヒトに唱和」している。その時、列席していたヤンは独り席を立たず、トリューニヒトの演説に賛意を示さなかった事を隣席の男性軍人から咎められ、怒声を浴びせられた、と云う。
この記述通りであるならば、ほぼ全ての列席者はこの時、極度の興奮状態にあったと言わざるを得ない。その時、彼らの熱狂の対象であるトリューニヒトを衆人環視の前で痛烈に批判し、卑劣漢と罵る女性が突如として出現したら、彼らは冷静に彼女の言葉を聞き続けられるだろうか。筆者には、次の瞬間、激高した集団の手で引き摺り倒され、殴る蹴るの暴行を受けるエドワーズの姿しか思い浮かばないのだが。
しかし、エドワーズは集団に暴行される事もなく、ヤンに連れられて、二人とも静かに会場を後にしたと書かれている。あくまで私見だが、この箇所はヤンの紳士ぶりと冷静さ、さらにヤンと個人的な交友関係があったエドワーズの勇気と健気さを称揚するため、ミンツ氏が意図的に曲筆、もしくは慰霊祭があったとの史実だけに基づき、創作したのではないだろうか。氏にはこの記述の史料的根拠を是非、開示して頂きたく思う。
なお、筆者の見解を付け加えるならば、この疑問に対する合理的な解釈は、いくつか想定され得る。国家元首が出席した式典であれば、当然、当時のメディアや公文書にも記載があるはずであり、事実、本慰霊祭の開催は、新聞報道や公式記録から確認できる。
よって、慰霊祭自体は史実だとすると、以下の見解が成り立つ。
① エドワーズとトリューニヒト、ヤンの言動全てが創作である。
② エドワーズの言動はあったが、会場内でのヤジ程度に過ぎず、

式典の進行に影響を与えなかった。或いは、トリューニヒトに話しかける前に、警備兵によって即座に連行され、列席者を刺激するに至らなかった。

③　トリューニヒトの演説が列席者を熱狂させた、との記述が誤り、過大評価だった。この演説は列席者を興奮させてなどおらず、エドワーズがトリューニヒトを面罵しても、むしろ内心で賛意を示す者が多かった。故に、エドワーズ、そしてヤンも、列席者から罵倒、暴行される事無く、静かに退出できた。

また、警備兵も立場上、エドワーズを拘束せざるを得なかったが、国防委員長トリューニヒトから指示されるまで動かなかったのは、彼らの多くもトリューニヒトの演説に反感を抱いており、それは職業的責任感を上回る大きさだった。

この場合、①は前述した通り、ミンツ氏の史観に基づく曲筆ないし創作である可能性が高く、②は最も常識的な解釈だろう。

そして、③は主戦派政治家トリューニヒトの政治的影響力とは、ミンツ氏が強調するほど圧倒的なものではなかった可能性を示唆する。実際、氏の著作の一節に「彼（トリューニヒト）を知る者の半数は雄弁家とたたえ、残る半数は詭弁家として忌み嫌う」ともある。前述した通り、当時の同盟社会では、主戦派と反戦派の主張がほぼ拮抗していたと思われるので、あくまで個人的には、③の解釈が最も妥当性を有するのではないか、と感じている。ミンツ氏、そして当該時代を専攻する研究者諸氏の批判と見解を期待するや切である。

当時の同盟社会は、上述のように、主戦派と反戦派の勢力がほぼ拮抗しており、その時、軍部内で、自派主導による帝国との和平を目指すシトレ派が台頭、対立派閥のロボス派を圧倒した結果、シトレ派は議会内の野党勢力、反戦派とも結び、その影響力を政界や官界、言論界にも広げていった。

そして、同派領袖シトレが構想、同派プリンスのヤンが実行したイゼルローン要塞の無血攻略は、まさにシトレ派の完全勝利に思えた。しかし、事態は急転する。言わずと知れた、帝国領侵攻作戦の実施、後世、アムリッツァ星域会戦と呼称される一連の戦役が勃発してしま

う。以下、節を改めて、アムリッツァ星域会戦へと至る流れと、シトレ・ロボス両派が如何に関与していったのか、概説してみたい。

第6節　帝国領侵攻作戦は何故、実行されたのか？

ミンツ氏の著作に基づく見解だが、イゼルローン要塞陥落後、同盟軍の帝国領侵攻作戦が決定した理由は、おおよそ以下の2点だ。

①　ヤンをライバル視し、功名を焦るアンドリュー・フォークが私的なルートを通じて、最高評議会議長の秘書に直接、作戦計画を持ち込んだため。

②　政権の支持率低迷に悩み、「100日以内に帝国に対して画期的な軍事上の勝利を収めれば、支持率は最低でも15パーセント上昇する」というコンピュータの計測に縋り、次回の選挙での勝利を求めた最高評議会議長ロイヤル・サンフォードが、持ち込まれた作戦計画の可否を最高評議会に図った結果、同じく選挙の勝利と政治家としての名声を求める、コーネリア・ウィンザーほか各委員長の賛成多数で可決されたため。

即ち、①はフォーク個人のスタンドプレー、②はサンフォード議長ほか政治家達の私欲と、帝国領侵攻作戦の理由を個人レベルの動機に求めている。しかし、それは本当だろうか？

まず①だが、フォークはロボス派の若手士官の中では、士官学校首席卒業の実績もあり、大いに将来を嘱望されていた。つまり、シトレ派におけるヤン的存在だったと言える。帝国領侵攻において、彼が総司令官ロボス元帥の側近、寵臣的立場にいた事は、彼ら2人の間に、それ以前から密接な関係が存在していた事を伺わせるに足る。

そのフォークが上位者ロボスの判断も無く、帝国領侵攻という一大作戦計画を個人的判断で最高評議会議長に繋がるルートへ持ち込むだろうか。組織人のルールとして、仮にそれが善意や厚意によって為されたものであっても、報告なしの自己判断、そして越権行為は許されるものではない。それは上位者の面子を潰し、プライドを傷つける事になり、ひいては自分自身の立場をも危うくしかねないからだ。常日頃からロボスと接していたフォークが、上位者の面子を潰しかねないような、危険な自己判断を行うものだろうか。

筆者は、フォークがサンフォード議長の秘書に直接、作戦計画を持

ち込んだ事は事実としても、それは派閥領袖ロボス、そして幹部のドーソンやロックウェル達の了解を得ての行為だったと考えている。或いは、政治家サイドに、作戦計画のブリーフィングを内々に行う事も命じられていたかもしれない。

では、ロボス派が帝国領侵攻作戦を立案し、政治家を動かしてまで、それを実現させようとした理由は何だろうか。それはここまでの記述で自ずと明らかになる。即ち、シトレ派のヤンが実現させたイゼルローン要塞の無血陥落という、同盟軍史上、最大級の武勲に対抗しえる功績を上げる事で、自派閥の復権を画策した、これ以外にあり得ないだろう。

だが、ここで疑問も生じる。イゼルローン要塞陥落という最大級の武勲を挙げ、同盟軍内でシトレ派が絶対的優位に立っている時、如何に国家元首や閣僚級政治家と結んだとは言え、影響力を減退させているロボス派が何故、巻き返しを成功させたのか？

ホーウッド元中将の証言や、当時の内部文書等に基づいた先行研究に拠る限りで、それには2つの要因があったようだ。

1つは、上記②への疑義と関連するのだが、まさにシトレ派が圧倒的優位を確立した、その事にこそ求められる。前述した通り、シトレ派は政治と軍事は対等であるべき、との思想の持ち主が多かった。故にロボス派は、彼らの思想はシビリアンコントロールの原則を逸脱し、軍隊を「国家内国家」にするものだと批判していたのだが、シトレ派が同盟軍を席巻した事で、彼らの主張が現実化する可能性が一気に高くなった。

この時、最高評議会議長サンフォード以下、各委員長（閣僚）、そして政治家や官僚、財界人達の多くは、国家内国家との「悪夢」の影に怯えたのではないか？それは軍部独裁政権への道を拓くものだったからだ。彼らが一丸となって、ロボス派が提出した帝国領侵攻作戦に賛成した結果、流石のシトレ派も、その大勢に逆らう事は出来なかったのではないか、これが筆者の着想である。

確かに、当時の同盟政府の要人達は、必ずしも人格的に優れた者ばかりではなく、直近の選挙での勝利を目論んだ者も確かにいただろ

う。しかし、権力が世襲される専制国家とは異なり、選挙という民意の選択を経なければ、権力者の地位に到達できず、かつ権力を行使する事もできない民主国家の政治家たちが、選挙の勝利を念頭に置いて、政治活動を行う事は絶対的な悪、腐敗堕落の象徴として、全否定されるべき事なのだろうか？

筆者は民主共和制に明るくはないが、権力とは如何に手に入れたかではなく、それを行使して如何なる事が出来たか、その功績によって妥当性を判断されるべきだ、という強堅帝ジギスムント1世の権力観は、一面の真理ではないかと考える故に。

加えて、当時の評議会議長サンフォードの為人も、帝国領侵攻作戦の可否に影響を与えたかもしれない。サンフォードは派閥抗争の結果、浮上した調整型の老政客で、万事に先例尊重主義だと、批判的に語られる事が多い人物だが、調整型という事は、各派閥のパワーバランスには人一倍、敏感だったのではないか。だとすれば、シトレ派優位の現状は、この老政客には、決して好ましい状態だとは見えなかっただろう。これもまた、ロボス派の提出した作戦計画を実行しようとした理由だったと考えられる。

また、先例尊重主義とは、必然的に過去を重んじる、保守的思考を齎す。シトレ派の独走を許してしまえば、民意によって選ばれた政治家が政治を行う、民主共和国家・自由惑星同盟は、一部の特権的軍人が政治権力をも掌握する、軍部独裁国家へと変質してしまいかねないと、深刻に恐れたのではないか。

彼が民主国家の理想と大義をどこまで信じていたのかは分からないが、側聞するに、帝国軍が同盟軍に大敗した、かのダゴン星域会戦時、最高評議会議長マヌエル・ジョアン・パトリシオと国防委員長コーネル・ヤングブラッドは強力な指導力を発揮、有能無比だが、とかく問題も多かったリン・パオ、ユースフ・トパロウル両元帥を統御して、かつ情報と補給の重要性を知悉する統合作戦本部長ビロライネンの提言を受け入れ、後方勤務本部の創設を許可するなど、当時の同盟は政治と軍事が二人三脚を組み、帝国という強敵を打ち破る大業を成し遂げたと云う。

仮に、サンフォードがダゴン会戦当時の同盟を理想と考えていたなら、例えて言えば、リン・パオ、トパロウル、ビロライネンら軍人だけで対帝国戦略を策定、実施して、評議会議長パトリシオと国防委員長ヤングブラッドに事後承諾のみ求めるかの如き状態に、同盟政府と同盟軍が陥る事を決して容認はしたくないだろう。

第7節　政治的軍人ドワイト・グリーンヒル～ヤンとフレデリカは「政略結婚」？

そして、帝国領侵攻作戦が決定した、もう1つの理由。これは筆者の想像による部分も大きいのだが、この時、シトレ派は、主流派シトレのグループと、非主流派グリーンヒルのグループに分裂した、この結果、シトレ派は一枚岩ではなくなり、さらに非主流派グリーンヒルはロボス派と野合し、帝国領侵略作戦に賛成したのではないか、と考えている。以下、その流れを解説したい。

前述した通り、同一派閥に属してはいたが、シトレとグリーンヒルの間には、思想的な対立関係が伏在していた。共に、政治と軍事は対等であるべき、との点では一致していたが、シトレは軍事力の直接行使はあくまで最終手段であり、それに先立つ政治交渉などで、武力行使が避けられるのならば、それが望ましいと考えていた。ただ、その政治交渉とは、政治家に全権委任するのではなく、少なくとも国防に関する限りは、軍部が主導、最低でも政府と対等の立場で当たるべきと考えており、対立するロボス派は、その点を「シビリアンコントロールからの逸脱」と、強く批判していた。

また、軍事力の行使に至っても、人的・物的被害は可能な限り低減するべきであり、事前の情報収集や補給確保によって、不戦勝の状態に持ち込めるのならば最良、開戦に至っても、機械化部隊の活用など、人命が損なわれない戦術を講じる事が望ましいと考えていた。シトレが第5次イゼルローン要塞攻防戦で実行した無人艦突入作戦は、彼の軍事思想の表れでもあり、それは御曹司的存在のヤンにも継承されている。いや、シトレの軍事思想をより先鋭化したのが、後世、魔術師とも称されたヤンが独創した、敵将の心理状態を巧みに利用した各種戦術だったと言えるかもしれない。

一方、グリーンヒルは、軍事力の行使により積極的だった。政治が誤った方向に向かっていれば、武力行使でそれを修正するのは当然、いや軍部の責務でさえあると考えていた節がある。これが後年、彼が

軍事クーデター勢力・救国軍事会議の議長になった遠因だと言えるだろう。

また、人命よりも社会秩序、さらには民主共和制の大義を守る事を重視する傾向にあり、軍隊の存在意義は、第一に国防だが、次いで国家の秩序維持も重要だと考えていた。救国軍事会議が首都星ハイネセンを支配していた時、同会議の一員、クリスチアン大佐が野党政治家エドワーズを撲殺した事を契機として勃発した民衆暴動と、軍隊による鎮圧行動、いわゆるスタジアムの虐殺事件が生じているが、これもまた、彼らグリーンヒル達のグループが有していた、秩序維持も軍隊の責務、との思想が遠因になっている。

彼らは、政治と軍事は対等であるべきとの思想に基づき、政治への従属に甘んじるロボス派への反感を共有して、同一派閥内にとどまっていたが、ロボス派が凋落、シトレ派の独尊が確立されてくると、これまで隠されていた路線対立が表面化してきた。

それに拍車をかけたのが、ヤンによるイゼルローン要塞陥落と、その後にシトレ、ヤン達が提唱し始めた帝国との和平交渉提案。あくまで対帝国戦争の完遂を求めるグリーンヒル一派には、これは野党や反戦派集団への迎合にしか見えなかった。対帝国強硬派で、急進的な若手士官らの代弁者的立場だったホーウッド元中将がグリーンヒルに接近していったのも、このシトレ達の主張に賛同できなかったからだろう。

ロボス派とグリーンヒル一派がいつ頃から接近していったのか、またどちらが先にアプローチしたのか、当事者のグリーンヒルやロボスらが死去している今、真相は闇の中だと言わざるを得ない。

だが、元々ロボスとグリーンヒル両者の関係は悪くなかった。帝国暦４８５（７９４）年の第６次イゼルローン要塞攻防戦、続く帝国暦４８６（７９５）年の第４次ティアマト星域会戦では、司令官ロボス、参謀長グリーンヒルでコンビを組んでいる。戦場でも、ロボスはグリーンヒルの献策を良く受け入れ、両者が極端に対立していた形跡は確認できない。

あくまで想像だが、どちらかと言えば鷹揚な性格だったロボスに、

同盟軍一の紳士とも評されたグリーンヒルが、ロボス派が提出した帝国領侵攻作戦に賛成する代わりに、戦後は対帝国戦争を完遂するため、政府に対する軍部の立場強化、特に自分達グリーンヒル一派と、主戦派政治家との関係強化に動いて欲しいと、辞を低くして求めたのではないだろうか。

プライドが高いロボスに対しては、下手に出る方が有効だと理解していたグリーンヒルには、その程度の「寝技」は朝飯前だっただろう。そして、遠征軍総司令官ロボス元帥の下、副司令官は置かれず、遠征軍のナンバー2たる総参謀長にグリーンヒル大将が就任したのは、ロボス派とグリーンヒル一派の同盟の証と言える。

なお余談ながら、ホーウッド元中将いわく「当時の高級軍人の中で、最も政治的な軍人」グリーンヒルの娘、フレデリカが第13艦隊司令官に就任したヤンの副官に配された人事だが、この背後に政治的軍人グリーンヒルと、同じく政治的感覚に優れたキャゼルヌ、この両者による無言の連携を感じるのは筆者だけだろうか？

前述した通り、グリーンヒルはシトレ派の幹部でありながら、非主流派のリーダーでもあり、ロボスとも比較的、良好な関係を保っていた。

そのため、同派領袖シトレ直系の軍人、特に政治的策謀を気質的に嫌う、武人的性格の強い前線指揮官、例えばビュコックやウランフ、ボロディン達から、必ずしも好意的に見られていなかった。

そこで、グリーンヒルは派閥内での立場強化を策して、彼ら前線指揮官が嘆賞する軍事的才能と武勲の持ち主であり、かつ領袖シトレの御曹司、プリンス的存在のヤンに、愛娘フレデリカを副官として差し出し、ヤンを通じて、彼ら前線指揮官達との関係修復を、さらには、次代の派閥領袖の座が確実視されるヤンとの関係強化を図ろうとしたのではないだろうか。

一方、シトレの腹心的立場だったが、シトレの年齢を考えるならば、ポスト・シトレ体制を見据えなければならないキャゼルヌは、派閥内の有力者で、シトレ引退後は領袖の目さえあるグリーンヒルを、派閥の御曹司で自身が庇護するヤンの新たな後ろ盾にしたかった。この

両者の利害が期せずして一致した事で、ヤン少将の副官フレデリカ・グリーンヒル大尉という人事が成立した、これをある種の「政略結婚」だと見なすのは、流石に穿ち過ぎであろうか？しかし、キャゼルヌに推薦された副官フレデリカ・グリーンヒルと初対面したヤンの態度と心理状態について、ミンツ氏は以下の通り、表現しているのだ。

ヤンはサングラスをかけ直して表情を隠し、アレックス・キャゼルヌという男は軍服のスラックスの下に、先端のとがった黒いしっぽを潜めているに違いないと考えた。

どういう意味だろうか？フレデリカ・グリーンヒルが後年、ヤン夫人になった事実を知っている我々は、女性と付き合おうとしない後輩ヤンが男やもめにならないよう、世話焼きの先輩キャゼルヌが将来の結婚相手として、ヤンに思いを寄せる、うら若き美女・フレデリカを推薦したのだと、微笑ましい解釈をする事が出来るが、そんな結婚相談所的感覚で、軍隊内の人事が行われるだろうか？

いや、フレデリカは卓越した記憶力と事務処理能力を有した、優秀な若手士官だった。新進気鋭で、シトレ本部長の御曹司的立場にあったヤンの副官として、確かに相応しい人材だった。それは間違いないが、フレデリカの父、ドワイト・グリーンヒルは当時、統合作戦本部次長の地位にある高級軍人で、副官就任前のフレデリカが勤務していた部署は同本部情報分析課、つまり、父は娘の上司だったのだ。上司が部下の人事情報を知り得ないはずはなく、また部下の人事に注文を付ける事など造作も無かっただろう。

そして、この父娘の関係は良好だった。ある夜、ヤンと共に訪れたレストランが満席だった時、偶然にも同じ店で食事をしていたグリーンヒル父娘が自分達のテーブルに招いてくれた事があったと、ミンツ氏は著作中に記している。

ドワイトは妻を早くに亡くし、父一人、娘一人の父子家庭だった。後年、父ドワイトが救国軍事会議議長として主導した軍事クーデターが失敗した後、自殺したと伝えられた娘フレデリカは「一時間、いえ、二時間だけいただけますか」と、上官のヤンに申し出て、私室に籠っている。自分と敵対した父に対し、娘が深い悲しみにくれている事が

分かる。それは逆説的に、父が娘に注いだ愛情の深さを証明するものだろう。

この父娘が深い親子愛で結ばれていたとするならば、首都星ハイネセンという安全な場所、そして自身の庇護下から愛娘を解き放ち、イゼルローン要塞攻略戦という、危険度と困難度では間違いなく第一級の軍務に従事させる父親は、一体、何を考えていたのだろうか？

ドワイトが軍務に私情を持ち込まない、誠実で良識ある人物だったとしても、同盟軍の組織規模から考えて、ヤンの副官に相応しい若手士官がフレデリカ以外に存在しなかったとは思えず、フレデリカがヤンの副官候補に挙げられた時、ドワイトがそれに異論を唱えても、内心、公私混同ではないかと感じる軍人はいるかもしれないが、父娘の関係性を知る者であれば「まあ、当然だろうな」と、納得する者の方が多いだろう。

さらに、ドワイト程の地位と政治力の持ち主であれば、人事部門に圧力をかけて、フレデリカに匹敵、いや、それ以上の才幹を持つ若手士官をヤンの副官に就任させる事も出来ただろう。

故に、この副官人事には、むしろドワイト・グリーンヒルの意向が働いていると考える方が自然ではないだろうか。敢えて想像の翼を逞しくすれば、フレデリカと初対面したヤンの心の声は、こうだったのではないか。

…やれやれ、先輩の悪魔の尻尾が指し示す先は、シトレ本部長からグリーンヒル次長に変わったんですか。軍内政治の生臭い所に、私をあんまり巻き込まないで欲しいものですけどねえ…

第８節　帝国領侵攻作戦の「裏面」～シドニー・シトレの陰謀

かくして、占領直後のイゼルローン要塞に総司令部を置き、帝国領侵攻作戦、後世アムリッツァ星域会戦と呼称される一連の戦役は開始が決定した。

ここまではロボス派の想定通りだと言っても良いだろうが、シトレ派もただ受け身であり続けた訳ではない。帝国領侵攻が既定路線となった以上、その中で、自派の勢力維持に努める責務が領袖シトレにはあった。そのシトレの思惑が端的に示されたのが、遠征軍の陣容だと筆者は考えている。

総司令官ロボス、総参謀長グリーンヒルの下、実際の戦闘を指揮する各艦隊司令官の人事を見ると、その大半がシトレ派の高級軍人で占められている。

これもホーウッド元中将の証言だが、第５艦隊司令官ビュコック中将、第１０艦隊司令官ウランフ中将、第１２艦隊司令官ボロディン中将、そして第１３艦隊司令官ヤン中将の４人は、シトレ直系の同派幹部であり、第７艦隊司令官ホーウッド中将、第８艦隊司令官アップルトン中将、第９艦隊アル・サレム中将はグリーンヒル一派に属し、第３艦隊司令官ルフェーブル中将のみ、ロボス派に近い中間派だった、と云う。

つまり、帝国領侵攻作戦が成功すれば、遠征軍総司令官ロボス元帥の武勲に報いるには、統合作戦本部長のポストしかなく、ロボスが制服軍人のトップに立てば、自ずとロボス派が同盟軍内の主流派に返り咲く。

だが、この時、実際の戦闘で武勲を挙げるだろう艦隊司令官にシトレ派の幹部を配しておけば、彼らの武勲と市民の人気を前面に出して、軍内に一定の影響力を保持できると想定したのではないか。

尤も、彼らシトレ派提督の登用には、帝国軍との戦闘に勝利したとの過去の実績と、彼らを国防の要に据えるべきという世論の存在、そ

して、ホーランド、パエッタ、ムーア、パストーレといった、ロボス派の有力な前線司令官が戦死、または負傷しているという、同派の人材払底という事情もあったようだが。

そして、筆者が特に注目したいのは、後方主任参謀に配されたキャゼルヌ少将の存在。彼はシトレの腹心的存在であり、遠征軍の後方主任参謀に就任するまでは、統合作戦本部長シトレ元帥の次席副官だった。このキャゼルヌの就任は、ミンツ氏の表現を借りるならば「久々の前線勤務」で、当時の同盟軍内の感覚では、異例の人事に近いものがあったのではないか。

実際、ホーウッド元中将も「これ程の大作戦である以上、補給管理のエキスパートとして名高いキャゼルヌ少将が参画するのは当然とは思ったが、彼は軍官僚だ。ハイネセンの後方勤務本部で要職に就くなら分かるが、まさか参謀として、前線に置かれた総司令部に名を連ねるとは思っていなかった」と語っている。筆者は、キャゼルヌの参謀就任に、シトレの強い意向を感じざるを得ない。

以下は筆者の着想、いや妄想に近いと自覚しているが、前線で補給体制を管理するキャゼルヌに、故意に、補給を滞らせて、前線の戦闘力を喪失させ、その事実を艦隊司令官のビュコック、ウランフ、ボロディン、そしてヤンから、敢えて、誇大に報告させる事で、撤退止む無しの状況を作ろうとした、これがシトレの密かな構想で、彼はそのために、自身の腹心たるキャゼルヌに因果を含め、強引に後方主任参謀に据えたのではないだろうか？

或いは、キャゼルヌの参謀就任は、帝国領侵攻作戦を受け入れる代わりに、シトレがロボス、そしてグリーンヒルに求めた条件だったのかもしれない。

無論、この事を証明する史料など無い。また、一時的に補給を滞らせても、キャゼルヌが更迭されて、別の軍人が後方主任参謀に就任すれば、結局、何の意味も無いではないか、と指摘する向きもあろう。

だが、奇妙な主張になるが、シトレ、そしてヤン達は、侵攻する自分たち同盟軍を迎撃する帝国軍司令官、即ち開祖ラインハルト陛下の軍事的才能を「信頼」していたのではないだろうか。ラインハルト陛

下ほどの軍人であれば、補給が滞り、攻勢に出られない同盟軍の隙を見逃すはずは無い、必ずや効果的な攻撃を仕掛けてくる。そのタイミングで、前線司令官から補給欠乏による戦線維持の不可を言い立て、少なくとも、イゼルローン回廊の帝国側出口までの撤退を具申する。司令部員、即ち部下であるキャゼルヌの失態である以上、上司的立場のロボス、グリーンヒルもその意見を無碍には出来ない。

キャゼルヌに戦犯の汚名を着せ、シトレ派の有力メンバーを1人失うが、これなら「補給さえ万全なら必ず帝国軍に勝てた」と、仮定の話を持ち出す事で、世論の追及を躱し、主戦派政治家の面子も立つ上、反戦派には「無益な戦闘を回避した」との事実を持ち出して、彼らの批判を逸らし、実際には戦っていない以上、武勲は無いが失態も無い訳で、シトレ・ロボス派ともに、自分達軍人に付く傷も少ない…

これがシトレの描いた絵図で、実際の運用を任されたのがキャゼルヌとヤンの2人だったのではないか。ミンツ氏の著作によれば、遠征前に行われた作戦会議の席上、ヤンはラインハルト陛下の軍事的才能を強調し、決して侮るべきではないと、強く警鐘を鳴らしたそうだが、その認識があったからこそ、シトレはこの構想に一縷の望みを託す気になったのかもしれない。尤も、そのラインハルト陛下、そして当時の参謀長オーベルシュタイン元帥が企図した焦土作戦によって、シトレの構想は完全に崩壊してしまうのだが。

また、この仮説には弱点がある。仮にシトレの構想通りに事が進んでも、その時点で同盟軍の損失は微々たるもの—軍の早期撤退と壊滅防止がシトレの目標だったのだから当然なのだが—で、撤退後、再び帝国領侵攻作戦が提議されれば、それを止める理由がない事だ。

仮定の上に仮定を重ねる話になるが、シトレは構想実現後、どう動くつもりだったのか、無理矢理に想像すれば、キャゼルヌの失態は軍の監督不行届、よって、制服軍人のトップ統合作戦本部長たる自分は引責辞任する、と早々に表明し、監督不行届との名目で、キャゼルヌの上司的立場だった遠征軍総司令官ロボス、総参謀長グリーンヒルにも、引退止む無しの状況を作り出し、後は両派の色がついていない人物を本部長に据えて、強引に事態の打開を図ろうとしたのではない

か。

アムリッツァ星域会戦後、統合作戦本部長に第1艦隊司令官クブルスリー中将が就任しているが、彼は両派から遠い、中間派と言うべき立場だった。仮に筆者の妄想が正鵠を射ていたとすれば、彼の就任は、或いはシトレ構想の僅かな名残なのかもしれない。

第9節　国防委員長トリューニヒトは何故、出兵に反対したのか？

シトレ・ロボス両派による、派閥抗争の観点から帝国領侵攻作戦、アムリッツァ星域会戦の裏面について、想像を交えつつ論じてきたが、ここからは視点を転じて、政治家側の事情をまとめてみたい。

前述した通り、ロボス派が提出した帝国領侵攻作戦は、これ以上、シトレ派の独走を許せば、軍部―シトレ派―主導の対帝国和平が実現、それは軍部が「国家内国家」と化す事に他ならず、最終的には、軍部独裁政権への道を拓くのではないか、との懸念―有体に言えば恐怖―を抱いた多くの政治家、官僚、財界人らの賛同を得て、最高評議会で可決されている。

では、この時、帝国領侵攻に反対した人物、具体的には財政委員長ジョアン・レベロ、人的資源委員長ホワン・ルイ、そして国防委員長ヨブ・トリューニヒト、彼ら3人は如何なる立場、思考に基づいて、出兵反対の論陣を張ったのだろうか？

まず、レベロとホワンの2人だが、当時の彼らは、反戦と帝国との和平、民力休養を政策綱領に掲げる野党所属の代議員であり、与党党首の最高評議会議長サンフォードの政敵だった。恐らく党議拘束も掛けられていただろう彼ら2人が、帝国領侵攻に反対票を投じるのは、何の不思議もない。

なお、野党議員だった彼らが入閣していたのは、少数与党だったサンフォードが政権基盤の安定を図るため、レベロ、ホワンが所属する野党と、一定の政策協定を結んでいたからだと見られる。

また、彼ら2人は元々、清廉な政治家で、その気質上、主戦派政治家と組んで利権漁りや猟官運動に精を出すロボス派軍人を決して快く思っていなかった。そのため、清廉で理想主義的、さらに帝国との和平を主張するシトレ派の軍人と比較的、近しい関係を維持していた。

ただ、教条主義的な性格でもあったレベロは、国家内国家を志向す

るが如き同派の主張を危ぶんでもおり、それが同派プリンスのヤンに対して、第二のルドルフになるのではと、警戒する視線を向けていた理由と思われる。バーラトの和約後、最高評議会議長に就任したレベロが、帝国高等弁務官レンネンカンプの勧告を退けず、ヤン逮捕に動いたのは、或いはその心中にずっと燻っていた、ヤンへの疑念の故だったかもしれない。

では、国防委員長トリューニヒトが反対した理由は何だろうか？ミンツ氏の著作によれば、トリューニヒトは当時の同盟の国力、軍事力では、帝国領侵攻など到底、成功するはずは無いと見切っていた、と云う。故に、遠征軍が敗北して無残に撤退すれば、侵攻賛成の論陣を張った現政権は市民の支持を失い、退陣せざるを得ない。しかし、出兵反対を明言した自分は、勇気と識見に富む政治家として、却って声価を高めるだろう。軍需産業の支持が無いレベロやホワンは所詮、自分の敵ではない。結局、最終的には自分が最高評議会議長の座に就く事になる…これがトリューニヒトの思惑だと記述しているが、一点の事実を無視していると指摘せざるを得ない。それは、トリューニヒトがロボス派と極めて近い立場の主戦派政治家だった、という事実だ。

前述した通り、帝国領侵攻作戦は、シトレ派の独走を食い止め、ロボス派の失地回復を目指すものだった。その時、ロボス派と近い主戦派政治家トリューニヒトが出兵に反対すれば、それはロボス派への裏切り行為に他ならず、これまで築いてきた同盟軍への影響力を一朝にして失う事にも繋がりかねない。

実際、ロボス派軍人や主戦派からは、トリューニヒトの出兵反対が公になると、激烈な非難の声が上がった。当時の雑誌報道等によると、彼自身の反帝国演説の一節を引用されて「銀河帝国の専制的全体主義を打倒すべきこの聖戦に反対する者は、すべて国を損なう者である！誇り高き同盟の国民たる資格を持たぬ者である！その者の名はヨブ・トリューニヒトである！」と、大書したビラがハイネセン市内に出回ったと云う。

後世の視点からすれば、アムリッツァ星域会戦は同盟滅亡を決定づけた歴史的敗戦であり、ミンツ氏の指摘する通り、トリューニヒトの

先見の明を証明するものなのだが、反対表明時の彼の態度には、不審な点が多すぎると感じるのだ。

まず、彼が出兵に反対票を投じた事に対し、同僚の評議員は驚愕したと伝えられており、彼の反対表明が唐突なものだった事が分かる。

この時、驚愕した評議員の中に、反戦派のレベロやホワンが含まれていたのか、それは不明なのだが、もしレベロ達も驚愕していたと仮定するなら、それは即ち、彼が主戦派という、今までの政治的立場を放擲し、新たな政治基盤となる反戦派に根回しをしていない事を伺わせる。そうである以上、反戦派と近いシトレ派に誼を通じていたとも考えにくい。

さらに、政治の渦中にいる政治家たちが驚愕したという事は、有権者にとっても「寝耳に水」だったはずだ。そして、彼は反対理由として「私は愛国者だ。だがこれはつねに主戦論に立つことを意味するものではない」としか語っていないが、これで納得する有権者がいると本気で思っていたのだろうか？

レベロやホワンの如く、具体的なデータを挙げて、論理的に出兵の不可を主張するならば、それに賛同するか否かは別として、自らの政治的意思を表明して、常に有権者の疑問に答えねばならない民主政治家として正しい姿勢だと言える。

一方、トリューニヒトの発言は、どれほど拡大解釈しても、私は愛国者だから、常に国の事を考えている。今回は出兵反対が国の為になると判断した、という意味にしか取れないが、有権者が聞きたいのは、出兵反対が何故、国の為になるのか、その一点なのだ。

レベロとホワンがその点に答えているのに対し、トリューニヒトは一切答えていない。これで納得できるのは、トリューニヒト先生のやる事に間違いがあるはずは無いと、彼を個人的に盲信している支持者だけだろう。同盟の有権者が悉く、そのような状態であれば、トリューニヒトの態度も頷けるのだが、前述した通り、彼を知る者の半数は雄弁家と称え、残る半数は詭弁家と忌み嫌っていた。

即ち、有権者の半数は反トリューニヒトだった可能性が高いのだ。こんな状態で「つべこべ言うな。黙って俺についてこい」的な態度を

取っては、反対派からの激烈な批難に晒される事は火を見るよりも明らかで、例えトリューニヒトを支持している人物でも「彼（トリューニヒト）は民主政治家としての責務を果たしていないではないか！」との反対派からの指摘に対して、有効な弁護を行う事は難しいだろう。その結果、支持者からも批判の声が上がる危険性に思い至らなかったのだろうか。

或いは、有権者など所詮、衆愚に過ぎない、同盟軍が敗北して、自分が出兵反対を主張していた事だけで、自分を褒め称えて、政治権力を託すに違いないと、ある意味、高を括っていたのかもしれない。確かに、結果論的にはそうなったのだが、筆者には、トリューニヒトは先見の明を有しながら、同時に視野狭窄に陥っているように思えてならない。

つまり、明確な理由なく出兵反対を主張したトリューニヒトが評価されるためには、同盟軍は誰が見ても明らかなほど、取り繕いようのない惨敗を喫する必要がある。

しかし、約１５０年に及ぶ旧帝国と同盟との戦争の歴史を紐解く時、アムリッツァ星域会戦ほど、圧倒的に勝者と敗者が分かたれた例は、かなり稀な事例だという事に気づく。これに比肩するのは、管見の限りで、帝国暦４３６（７４５）に勃発した第２次ティアマト星域会戦。ブルース・アッシュビー元帥率いる同盟軍に帝国軍が惨敗、当時「軍務省にとって涙すべき四十分間」と言われたほど、帝国軍の有能な貴族将官が大量戦死した一戦くらいである。

それ以外は、惰性で戦争をしていると言いたくなる程に、勝敗が明らかでない戦闘が延々と続いている。旧王朝の軍人時代、開祖ラインハルト陛下は、この状況を「戦争ごっこ」と断じたとも伝えられる。トリューニヒトの「先見の明」は、帝国暦４８７（７９６）年の帝国領侵攻が、ラインハルト陛下が指摘する「戦争ごっこ」に終わる事は無いと、何故、確信できたのだろうか？

いや、この時の同盟軍の規模は史上最大、到底「戦争ごっこ」などと言えるレベルではなかった、と主張する向きもあるかもしれない。だが、それこそナンセンスだ。大軍で出兵したからと言って、その結

末は必ず大勝利、または大敗北と決まっている訳ではないだろう。
　確かに大軍は必ずしも勝利の要件にはならず、運用方法を誤れば、時として敗北の原因にもなる、これは軍事学の常識だが、例えそうでも、大軍を動員する理由は、偏に勝利を確実なものとするためであり、敗北の原因とするために大軍を編成する軍隊など存在するはずが無い。まして、この時の同盟軍は、初戦の士気は高く、解放軍、護民軍としての意気に燃えていた。彼らが敗北を求める理由など、宇宙の果てまで探しても見つかる事は無かったのだ。

第１０節　議長サンフォードと国防委員長トリューニヒトの密約

先のミンツ氏の記述に戻って考えるならば、当時のトリューニヒトは、同盟の国力、軍事力では到底、帝国領への侵攻など成功する訳は無い、と見切っていたらしいが、では、成功しない＝大惨敗、この等式が何故、トリューニヒトの脳裡で成立したのだろうか？筆者には、その点がどうしても理解できない。

戦史に照らすならば、旧帝国と同盟の戦争は勝敗が明確でないものが大多数で、いわゆる痛み分けで終わる事が常態化していた。

さらに、たとえ敗北を喫しても、軍の政治宣伝で、勝利と喧伝する事も日常的に行われていた。直近の実例として、アスターテ星域会戦で三個艦隊が惨敗しても、我が勇敢なる同盟軍は悪逆な侵略者・銀河帝国がアスターテ星域を犯そうとする、その邪悪な意図を挫き、祖国と市民を守護するという責務を全うした、その立役者こそ、エル・ファシルの英雄にして、アスターテの英雄となったヤン・ウェンリー准将である！などと主張して、敗戦を恰も勝利であるかの如く言い立てている。

そして、軍がこの情報操作を行った時、軍政の長たる国防委員長は一体誰だったか。そう、ヨブ・トリューニヒトその人である。

いや、仮に帝国領侵攻作戦で勝利を収めたとしても、国防委員長の職権を用いて、敗北したと逆宣伝する…それこそあり得ない。そんな事をしようとすれば、ロボス派に裏切者呼ばわりされた時の比ではない。全ての同盟軍人がトリューニヒトを敵視する事は疑いなく、万が一、そんな事を企図した事が公になれば、過激な右翼団体・憂国騎士団などから、売国奴として、間違いなく命を狙われるだろう。トリューニヒトが自殺志願者でもない限り、そんな愚行に手を染める理由は無い。

そこで、別の視点から考えてみたいと思う。トリューニヒトは、同盟軍が惨敗すると確信したから出兵に反対したのではなく、同盟軍が

勝利しようが、または敗北しようが、どちらでも良かった、別の理由があって、出兵反対に票を投じたのではないか、という可能性だ。

以下の記述も史料上の根拠が無い、筆者の着想、妄想の類なのだが、トリューニヒトに出兵反対の票を投じさせたのは、万が一、同盟軍が取り繕いようのない大惨敗を喫した時に備えた、最高評議会議長サンフォードの「保険」だったのではないか。

この帝国領侵攻作戦を成功させて、市民が熱狂する武勲を挙げれば、それを主導したロボス派、ひいては出兵にゴーサインを出したサンフォード政権の声価が高まる事は疑い得ない。その余勢を駆って、次回選挙で勝利を収める事が、サンフォードほか各委員長達の狙いだった。

しかし、もし負ければ？たった半年前、アスターテ星域で、三個艦隊が壊滅した事をもう忘れたのだろうか？半年の間に、同盟軍艦隊は飛躍的に強化されたのだろうか？敗北すれば、戦犯として世論の激烈な非難に晒される事は、火を見るよりも明らかだ。その時、彼ら委員長達の政治生命は終了するのだ。

議長サンフォード以下、各委員長達、代議員達、彼らのスタッフや支持者達、そして政治談議に花を咲かせる有識者やメディア…恐らく万単位に上るだろう政治関係者の誰一人として、遠征軍が敗北した時に何が起こるか、言及しなかったのだろうか。

いや、当時の同盟社会では、反戦派が相応の勢力を維持していた、帝国との戦争を非とする彼らが「最悪の想像」をしなかったとは思えない。惨敗すれば同盟社会がどれほど悲惨な状態に陥るか、それを喧伝する事は、自分達の政治的主張の妥当性を補強する、格好の材料になるだろうから。

サンフォード政権の委員長達、そして当時の同盟市民は、揃いも揃って、救いようのない愚者だったと言ってしまえばそれまでなのだが、どうにも違和感を禁じ得ない。筆者は、この違和感に、トリューニヒトの出兵反対の謎を解く鍵が潜んでいると思ったのだ。

結論から述べると、議長サンフォード本人、或いは彼の周囲にいるスタッフの中に、この事に気が付いた者がいたのではないか。サン

フォードが失脚すれば、自分達の地位や職も棒に振ると、自己保存の欲求も手伝い、万が一、同盟軍が惨敗しても、少なくとも自分達の地位は保全できる、何らかの対策を講じるべき、と主張したのではないか。

そして、その対策が主戦派の与党政治家、トリューニヒトと水面下で交渉、敢えて出兵反対の票を投じさせる事だった、これが筆者の着想である。以下、彼らの構想を簡単に説明したい。

まず注意すべきは、出兵反対を主張したとの点では同じだが、レベロとホワンは反戦派の野党政治家、対してトリューニヒトは主戦派の与党政治家、それも主戦派の支持を広く集める、少壮の政治家だった事だ。与党内部で、彼が次代の幹部、党首候補と目されていた事は想像に難くない。そして、トリューニヒト本人も、政治家の最高位、最高評議会議長の椅子を狙う野心を隠そうともしていなかった。

だが、当時の彼は41歳、政治家としては未だ少壮、中堅の立場だった。筆者は同盟政界の人事には詳しくないのだが、常識的に考えて、順調に出世の階段を登ったとしても、後10～15年は必要なのではないか。

もし、野心溢れるトリューニヒトがそれを迂遠と感じていたなら…彼の内心をサンフォードが察知していたとすれば…両者の利害が一致する機縁が茲にある。

同盟軍が勝利すれば、サンフォードは続投、トリューニヒトは自身の不明を恥じ、自ら国防委員長を辞任すると表明。サンフォードは彼の誠実さ、潔さを称揚しつつも、世論やロボス派からの批判を躱す意味で、辞職を了承。ただし、政府の外郭団体や、有力な軍需企業など、天下り先を密かに斡旋し、政財界との繋がりを保持できるよう処置する。

そして、世論のほとぼりが冷めた頃を見計らって、再び閣僚入りさせ、与党内でも議長サンフォードの後継者的地位を与える。

逆に、同盟軍が敗北すれば、実際の歴史がそうであったように、サンフォードが辞職、トリューニヒトは、出兵反対した自身の先見の明を言い立て、暫定議長に就任、サンフォードの後継者に収まる。

この時、サンフォードが党首を務める与党は、党として出兵賛成しているので、与党内に反トリューニヒト勢力が存在しても、既にトリューニヒトの暫定議長就任を阻むだけの力は無く、さらに、トリューニヒトを推さなければ、野党のレベロやホワンが暫定議長に就任するかもしれないと言えば、彼らを抑える事は十分に可能だろう。

野党や反戦派に対しては、出兵反対したとの事実を前面に出し、今後の政策協定、或いは連立の可能性を示して、その代わりにレベロやホワンの擁立を断念させる。

そして、サンフォードには適当な天下り先をあてがい、その地位と財産を保障するだけではなく、暫定議長トリューニヒトがメディアに圧力をかけ、ウィンザー夫人ら主戦派の委員長達がどれほど無責任だったか、補給線が崩壊しているのに、選挙対策のため、世論を納得させられる勝利を得るまで同盟軍の撤退を許さず、結果として数千万人の兵士を死に追いやった大量殺人犯だと、激烈なバッシングを浴びせる一方、前議長サンフォードは撤退すべきではないのかと言い、彼らを窘めようとしたのだが、その強硬姿勢を抑える事が出来なかったのだと、メディアに嘘のリークをして、彼への批判のボルテージを下げるようにする…

これがサンフォードとトリューニヒトとが秘密裏に締結した盟約だったとすれば、トリューニヒトの唐突な出兵反対が理解できると思うのだ。

そもそも、国家の命運を左右しかねない一大作戦の可否を決するのに、事前交渉や調整を一切していないなど、まず考えられない。ミンツ氏の著作では、評議会の席上、サンフォードが唐突に選挙云々の事を言いだしたと受け取れる記述になっているが、「１００日以内に帝国に対して画期的な軍事上の勝利を収めれば、支持率は最低でも１５パーセント上昇する」という、コンピュータの計測結果なるものを事前に準備していた時点で、サンフォードが評議会の結論を一定の方向に誘導する意思を持っていた事の証左ではないか。

そうであれば、この採決結果はサンフォードの想定通り、事前の票読み通りだった可能性が高い。票読みが出来ていたからこそ、ト

リューニヒトが反対票を投じても、多数決で帝国領侵攻が可決されると確信していた。そして、評議員がトリューニヒトの出兵反対に驚愕した事実は、むしろサンフォードの機密保持能力の高さを伺わせる。

さらに、同盟軍の退勢が明らかになり、レベロやウィンザー夫人が激烈な議論を戦わせるのを横目に、トリューニヒト、そしてサンフォードは一切、発言をしていない。「保険」を掛けている彼らにしてみれば、トリューニヒトは、自分が暫定議長に就任する日が刻一刻と近づいている事に内心、快哉を叫んでいただろうし、サンフォードは不用意な発言をして、敗戦後に浴びせられるバッシングの材料を増やすまいと考えていたのだろう。

ミンツ氏の著作では、議長サンフォードは、国防委員長トリューニヒトの影に隠れた、無能な老政客として描かれているが、トリューニヒトという派手な偶像の陰で、密かに会心の笑みを浮かべていたのは、或いはサンフォードだったのかもしれない。

もちろん、以上の内容は全て、史料上の根拠など無い、筆者の想像に過ぎない。トリューニヒトとサンフォードの間に秘密協定など無く、トリューニヒトは帝国領遠征失敗＝同盟軍惨敗と、何の根拠も無いままに確信して、開祖ラインハルト陛下とオーベルシュタイン元帥による焦土作戦が奏功した結果、偶々、現実が確信した通りになっただけかもしれない。サンフォードは帝国領侵攻が成功すると、やはり何の根拠も無く盲信していただけの愚者だったのかもしれない。同盟末期の政治史を専攻する研究者諸氏による御批判を期待するや切である。

第11節　イゼルローン要塞攻略戦①～ブレーメン型軽巡洋艦の謎

同盟軍末期の二大派閥、シトレ派とロボス派の派閥抗争の実態と、トリューニヒトやレベロなど、彼ら軍人達を取り巻く政治家達の動向について、筆者の想像を多分に交えつつ描いてきたが、それらを前提として、当初の問題意識「同盟軍人ヤン・ウェンリーは何故、敵国・銀河帝国の支配者層である門閥貴族に対して、有効な軍事指導を施し、なかつ、彼らがその指導に従うと確信できたのか？」について、筆者なりの分析を加えてみたい。

まず、エル・ファシル以降のヤンについて、以下の内容を再確認しておきたい。

①　エル・ファシルの英雄となったヤンは、その知名度と人気の高さを見込まれ、同盟軍の各派閥による獲得競争に晒された。

②　そのヤンを獲得したのは、ヤンと個人的な面識があった、かつての士官学校校長、シドニー・シトレが領袖を務めるシトレ派だった。

③　シトレの庇護下に置かれたヤンは、その軍事的才能を十全に発揮し、次第にシトレの御曹司的立場、シトレ派のプリンス的存在となり、派閥の後押しを得て、武勲を過大とも言える程に高く評価されて、当時の同盟軍では異例と言える、２０代中の将官昇進を果たす。

④　自派主導で帝国との和平実現を目指すシトレは、その構想実現のため、帝国との交渉材料となり得る圧倒的な軍事的勝利、即ちイゼルローン要塞陥落を策し、実戦部隊の指揮官にヤンを抜擢、要塞陥落を実現させる。

⑤　シトレ派が同盟軍を席巻する事態を見て、彼らシトレ派が同盟軍を政府の統制を受け付けない、国家内国家としてしまう事、同盟が軍部独裁国家へと変質しかねない事を憂慮した政治家達と、シトレ派に対抗できる功績を上げて、自派の失地回復を目論むロボス派の利害が一致、そこに帝国との和平路線を否定するグリーンヒル一派が合流し、彼らの数の力で、帝国領侵攻作戦が決定。この時、ヤンはシトレ

の意向で前線指揮官の1人となる。さらに同盟軍の早期撤退を策したシトレ構想において、キャゼルヌと水面下で連携、前線の意向を撤退へと集約する役割を担っていたと思われる。

以上の流れを踏まえると、ヤンはエル・ファシル以降、一貫してシトレの庇護下にあり、彼の構想実現のために行動していた事が分かる。２０代中の将官昇進は、異数とも言えるヤンの軍事的才能の故もあっただろうが、エル・ファシルの英雄として、市民や兵士への高い人気と知名度で、シトレ派の勢力拡大に貢献した事への見返りだったのだろう。

そして、ヤンの人気と知名度、そして評価を揺るぎないものにしたのが、言わずと知れたイゼルローン要塞の無血攻略だ。この攻略戦は「軍事上の芸術」とさえ評され、敵将の心理を読み切った、ヤン以外の誰にも成し得ない素晴らしい戦術だと絶賛されている。筆者は軍事には明るくないのだが、当時の帝国、そして同盟の政治状況を念頭に置くと、これが単なる軍事作戦ではなかった可能性に思い至った。以下、解説していきたい。

まず、本攻略戦の要は、ヤンの特命を受けた白兵戦部隊「薔薇の騎士（ローゼンリッター）」連隊長、ワルター・フォン・シェーンコップが、帝国軍人「フォン・ラーケン少佐」に偽装、要塞司令官トーマ・フォン・シュトックハウゼン大将を人質として、降伏を承諾させた事であるのは、衆目の一致する所だろう。

そして、シェーンコップ以下、ローゼンリッター連隊員を要塞まで運んだのは、かつての戦闘で同盟軍が鹵獲した、帝国軍のブレーメン型軽巡洋艦だと伝えられるが、筆者はこの点に若干の疑問を覚えた。

帝国軍所属の艦艇ならば、軍のデータベースに登録があるはずではないか。そして、かつての戦闘で同盟軍に鹵獲されたのなら、データベースから情報が抹消、或いは情報が修正されているのではないか。

だとすれば、イゼルローン要塞に接近して、その哨戒網に捉えられた時点で、データベース上に登録情報が存在しない、或いは「撃沈ないし叛乱軍に拿捕された可能性あり」との情報が明らかになれば、いかに緊急時とは言え、シュトックハウゼン以下、要塞駐留部隊の疑惑

を招いて、入港が許可される事は無いのではないか。
筆者は軍事に明るくないので、軍事史を専攻する同僚の研究者数名に問い合わせてみたが、回答は「旧王朝時代から、軍の所属艦艇は全て、軍務省所管のデータベースに登録されている。同盟軍の艦艇情報でさえも一部登録されていた。このデータベース上の情報は、全艦艇と軍事施設の管制コンピュータから照会可能で、さらに各艦艇の管制コンピュータと、軍務省のホストコンピュータとは常時リンクしている。艦艇情報は部隊編成上の基礎資料なので、変更が生じればリアルタイムで修正する必要があるからだ。
また、戦闘時は手動で艦艇情報の検索、照会をする遑など無いので、少なくとも正規軍所属の艦艇、そして軍事基地であれば、艦艇情報の検索、照会は自動で行われていた。これは同士討ちを避けるための措置で、自動検索を停止する事はシステム上、不可能だった。さらに、システムの私的な改変は重大な軍規違反でもある」だった。
この指摘が正しいのならば、シェーンコップらが乗り込んだ軽巡洋艦が疑問を抱かれずに、イゼルローン要塞へ入港できた理由が分からなくなる。
また、作戦構想時、ヤンやキャゼルヌはその事に気が付かなかったのだろうか？筆者は、このイゼルローン攻略戦の概要を同僚数名に説明し、その見解を求めた所、１人が興味深い指摘をしてくれた。それは「領主貴族の私設艦隊に属する艦艇であれば、軍務省のデータベースに登録されていない可能性が高い」。
彼曰く「大貴族が所有する私設艦隊に所属する艦艇は、当該貴族が財務省に発注して建造させた新造艦と、帝国正規軍から払い下げられた中古艦、この２種類が混在していた。後者は正規軍から私設艦隊に所属が変更された時点で、その情報がデータベースに登録されるが、変更後、撃沈または廃艦されても、貴族側から特に申告しない限り、データベース上の情報が変更される事は無い。前者であれば、そもそも登録されない可能性がある。法規上、全ての戦闘用艦艇は帝国政府、軍務省が一元管理する事になっているのだが、帝国暦４３８年公布の分国令で、領主貴族の独立性が大幅に認められた結果、この規定

は有名無実化している」。
　この指摘に基づくならば、イゼルローン攻略戦に用いられた軽巡洋艦は、貴族の私設艦隊に属する艦艇だったのだろうか。だが、貴族の私設艦隊とは、宇宙海賊や反帝国勢力から自領を防衛するため、或いは帝国政府や他家に対して、自家の軍事力を誇示する為に設置される性格のもの。貴族艦隊が同盟軍と干戈を交えた例は多くは無く、少なくとも帝国暦４８７（７９６）年の第７次イゼルローン要塞攻略戦に先立つこと数年間、同盟軍と貴族艦隊が戦った史実は無い。

第１２節　イゼルローン要塞攻略戦②～フォン・ラーケン少佐の謎

そこで、別の角度から考えてみる事にした。要塞攻略の指揮を取ったシェーンコップが使った偽名、フォン・ラーケン少佐。この人物名は、その場凌ぎで創作した架空の名前だったのか、それとも、誰かモデルが存在したのか。

帝国軍の組織規模を考えれば、同姓の軍人など膨大に存在するだろう。故に、適当な姓名を用いても問題はなさそうだが、任務の性質を考えるならば、万が一、シュトックハウゼンや彼の幕僚の中に、同姓の人物の知り合いがいれば、要らざる疑念を持たれる可能性もゼロではない。

最も望ましいのは、シュトックハウゼンが内心、その実在を確信できる人物で、帝都オーディンからの火急の使者として訪れたと言われても納得できる人物、さらに、その発言には逆らえない、少なくとも無視や軽視は出来ない人物に成りすます事。そういう人物であれば、シュトックハウゼンが警戒心を抱く事なく、不用意に接近してくる可能性は極めて高くなるからだ。

当時の帝国軍人で、上記の条件に該当するような人物が存在するのか。軍務省に登録されている膨大な軍人情報を調査していったところ、実に興味深い人物が発見された。

彼の名はウィリバルト・フォン・ラーケン。帝国暦４５２（７６１）生まれ。士官学校卒業後、少尉に任官、軍務省に勤務。同省調査局に所属、叛乱軍（同盟）の情報収集任務を主に担当。同４８２（７９１）年、大尉に昇進、フェザーン自治領・高等弁務官府駐在武官として赴任。同４８７（７９６）年、少佐に昇進、ブラウンシュヴァイク公爵家・私設艦隊に軍事顧問として出向。同４８８（７９７）年、リップシュタット戦役勃発に伴い、同公爵家・私設艦隊の情報参謀として従軍したと見られるが、詳細及びその最期は不明。

以下は筆者の想像に過ぎないが、シェーンコップが偽装したのは、このラーケン少佐その人だったのではないか。

彼は任官後、一貫して情報将校の道を歩んだ練達の諜報員だった。対同盟の情報戦、謀略戦の最前線たるフェザーン自治領に駐在武官として赴任したのも、その手腕を評価されての事だったと思われる。

そして、フェザーンでの勤務中、その職務を通じて、同盟軍情報部とのコネクションが生じた。帝国軍人が同盟軍人と誼を通じる事などあるのかと訝る向きもあるかもしれないが、情報戦は艦隊戦などとは異なり、敢えてこちらの情報をある程度開示して、その見返りに敵国の情報を得る事は、常套手段の1つだと云う。直接の関係はないが、かつて帝国と同盟の官憲が密かに協力して、かのサイオキシン麻薬の摘発に乗り出した事例もある。

また、フェザーンという場所も、帝国と同盟の密かな「握手」を促す面があったかもしれない。当時、両国はフェザーンの経済的侵略を受けており、国債購入を通じて、フェザーンは両国財政にも多大な影響力を持つようになっていた。フェザーンを牽制するとの一点において、あくまで現場レベルの話だが、帝国と同盟が共同歩調を取る事は珍しくなかったようだ。しかし、その性格上、詳細は明らかになっていない面が極めて多い。後日の情報開示と、さらなる研究が俟たれる。

さて、本論の主題との関係で重要なのは、当時の同盟軍はシトレ派が勢力を伸ばしており、同派領袖で、統合作戦本部長に就任したシドニー・シトレ元帥は、直接の武力行使に先立ち、政治交渉で優位を確保する事を理想とする軍事思想の持ち主だった事。彼が主導する対帝国戦略が、情報戦や諜報戦に重きを置くようになったのは、理の当然だと言わざるを得ない。そして、この時、練達の帝国諜報員・ラーケン少佐の存在は、シトレ元帥以下、当時の同盟軍幹部、またシトレ派所属の軍人達に認識されたのではないか。

筆者は、ラーケン少佐が同盟軍の調略を受け、逆スパイになったのではないか、と考えている。公開された新史料によると、当時、軍務省内で、帝国側の軍事情報が同盟軍に流れているのでは、との疑惑が

持ち上がっている。帝国軍の疑惑が確信となったのは、帝国暦４８７（７９６）年に勃発したアスターテ星域会戦。同盟軍は帝国遠征軍の兵力を読み切っていたかのように、二倍もの迎撃戦力を調えているが、三個艦隊の動員は一朝一夕に成し得る事ではない。戦闘自体は、開祖ラインハルト陛下の卓越した戦術指揮能力で圧倒的な勝利を収める事が出来たが、これは同盟軍の実戦指揮官達が大兵力の運用を誤ったからであり、仮にラインハルト陛下以外の指揮官が帝国軍を率いていたならば、逆に同盟軍の圧倒的な勝利に終わっていただろうとは、軍事史家が一致して指摘する所だ。

そして、アスターテ星域会戦後、帝国軍は高等弁務官府内部に巣食うスパイを一掃する気になったのだろう。駐在武官全員に帰国と転属命令が発令されている。

だが、ラーケン少佐は転属命令を受領する前に、軍務省人事局にブラウンシュヴァイク公爵家・私設艦隊への出向願を提出、既に同公爵家の了承は得ているとした。

この時、ラーケン少佐は逆スパイの疑惑を掛けられ、駐在武官の地位を逐われる以上、もはや帝国軍にとどまる事は出来ない、密かな粛清の対象にすらなる、と感じたのだろう。この身の振り方が出来たのは、駐在武官時代から、ブラウンシュヴァイク公爵家と誼を通じ、同盟やフェザーンの機密情報を密かに流していたからだった。

同公自身はラーケン少佐の存在を関知していなかったとしても、側近のアンスバッハやシュトライトにしてみれば、フェザーンや同盟とのコネクションを持つ帝国軍人は、是非とも確保しておきたい人材だっただろう。当時、皇帝フリードリヒ４世には皇太子がおらず、主君ブラウンシュヴァイク公が息女エリザベートを女帝として即位させたいと望んでいる事を彼ら両名は知悉していた。そして同時に、主君の競争相手、リッテンハイム侯もまた、自身の息女サビーネを女帝にしたいと野心を燃やしている事も。

両家とも、帝国有数の私設艦隊を有している以上、必ず武力衝突が発生する。その時、戦費の調達先であり、万が一の時の亡命先として、フェザーンとの関係は強化しておくに越した事はなかった。

さらに、最悪の想像をするならば、リッテンハイム侯が帝国政府を主宰する国務尚書リヒテンラーデ侯、さらには帝国軍三長官、軍務尚書エーレンベルク元帥、統帥本部総長シュタインホフ元帥、宇宙艦隊司令長官ミュッケンベルガー元帥らと結び、ブラウンシュヴァイク公爵家軍が帝国正規軍とも戦わねばならなくなったとしたら、それに対抗できる武力は唯一、この銀河系宇宙には同盟軍しか存在しない。

当時の同盟軍を牛耳るシトレ派とのコネクションを持つラーケン少佐の存在は、仮に逆スパイであったとしても、いやだからこそ却って、帝国軍と事を構えねばならなくなった時、心強い味方になってくれると、アンスバッハ達は期待したのではないか。

また、同公爵家に仕えた軍人の中には、後年、新王朝の初代軍務尚書オーベルシュタイン元帥の腹心となった調査局長フェルナー少将など、謀略戦やテロ活動を得手とする軍人がいた事は良く知られているが、或いはラーケン少佐の存在をアンスバッハ達に紹介し、彼が同盟やフェザーンの機密情報を公爵家に流すように仕向けたのは、当時、ブラウンシュヴァイク公に仕えていたフェルナー少将だったのかもしれない。

ブラウンシュヴァイク公爵家の私設艦隊に籍を移したラーケン少佐だが、それ以前から、練達の諜報員として、対同盟戦線に勤務する帝国軍人の中では有名だった。彼の存在は、イゼルローン要塞司令官シュトックハウゼンの耳にも届いていた事は間違いない。

何故断言できるのか。その理由は、彼シュトックハウゼンは、ブラウンシュヴァイク公爵家の一門に属する武官貴族の当主でもあったからだ。対同盟戦線では名前の知れたラーケン少佐が主家の私設艦隊に籍を移したとなれば、その情報が軍内部、そして貴族社会内部から、二重の情報網を通じて、武官貴族当主のシュトックハウゼンの耳に入らないはずは無い。

ラーケン少佐に偽装したシェーンコップがＩＤカードさえ調べられる事無く、シュトックハウゼンの前に通されたのは、彼が一門党首ブラウンシュヴァイク公オットーから派遣された使者だと、シュトックハウゼンが誤断したからだと思われる。

ラーケン少佐（シェーンコップ）が「叛乱軍（同盟軍）が回廊を通過するとんでもない方法を考えついた」と、冷静に考えるならば、失笑ものの大嘘をぬけぬけと語っても、同盟軍の中枢部ともコネクションを持っているだろうラーケン少佐なら、或いは同盟の軍事機密を密かに入手できるかも…そして、ラーケン少佐から報告を受けたブラウンシュヴァイク公が一門党首の責務として、イゼルローン要塞司令官の自分に一早く知らせてくれようとしたのだ、そう思ったとしても不思議ではない。

いや、そう誤断するよう仕向けるため、ラーケン少佐のＩＤカードを準備し、軍務省データベースに登録情報が無い貴族家所有の軽巡洋艦をわざわざ用意した、これこそ魔術師ヤン・ウェンリーが仕込んだ、本当の魔術の「ネタ」だったのではないだろうか。

第13節　イゼルローン要塞攻略戦③～ブラウンシュヴァイク公爵家の影

そして、さらに大胆な仮説を提示したい。このヤンによるイゼルローン要塞攻略戦が、ブラウンシュヴァイク公爵家の黙認と密かな支援を受けて行われた可能性だ。

前述した通り、自派主導による帝国との和平締結、その交渉材料となる軍事的勝利、そのためにイゼルローン要塞を攻略する、これがシトレ派の構想だった。同派プリンスのヤンが攻略戦に先立ち、帝国との和平に言及しているのはその証左だろう。

だが、シトレやヤンは、イゼルローン要塞陥落後、具体的に誰と和平交渉を行うつもりだったのだろうか？

銀河帝国はその国是から、外国の存在を認めておらず、外交交渉を司る部署が存在しない。アムリッツァ星域会戦後、両軍の交渉の結果との形式で、捕虜交換が行われた事を考慮するならば、宇宙艦隊司令部を窓口として想定していたのかもしれないが、同盟との和平――帝国流に言い直せば、叛乱軍の赦免と自治の許可となるか―は、帝国の国是に事実上の変更を迫る重大事、帝国政府や貴族社会から強い反論、異論が出る事は想像に難くない。

故に、それらの異論を封殺して、政府と軍、そして貴族社会の総意を和平で一本化する、少なくとも和平止む無しの情勢に持って行く必要がある。最高権力者である皇帝フリードリヒ４世が和平を承諾してくれれば最良だが、残念ながらフリードリヒは無気力で国政に意欲を見せず、寵姫に溺れる暗君として、貴族社会からも軽視されていた。よって、フリードリヒに代わって、帝国の「世論」を一本化できる権力者が求められる。

この条件に合致するのは、国務尚書として国政全般を司っていたリヒテンラーデ侯クラウス、そしてフリードリヒの女婿であるブラウンシュヴァイク公オットーと、リッテンハイム侯ウィルヘルム、この３人だろう。

帝国軍三長官のエーレンベルク、シュタインホフ、ミュッケンベルガーは、帝国軍は掌握していたかもしれないが、政府や貴族社会へ強い影響力を有していた形跡が無く、かつこの三者は共同歩調を取れるほど、親密な関係ではなかった。

さらに、開祖ラインハルト陛下は、この時点ではローエングラム伯爵家の門地を継承したばかり、平民や下級貴族の支持を集め始めていたとはいえ、貴族社会中では、誠に不敬な表現ながら、皇帝陛下の姉に対する寵愛を笠に着る、生意気な金髪の孺子、でしかなかった。

そして、上述の三人の中でも、まずリヒテンラーデ侯は相応しくない。その理由は、彼には他の二人とは異なり、自前の武力が無く、経済力も帝国最大の領主貴族であるブラウンシュヴァイク公、リッテンハイム侯には到底、及ばないからだ。

もしリヒテンラーデ侯が独自に、ブラウンシュヴァイク公、リッテンハイム侯と競えるだけの勢力を有していたならば、フリードリヒ4世崩御後、同帝の孫、エルウィン・ヨーゼフを冊立するために、元帥府を開設して、自分の意のままになる軍事力を保有していたラインハルト陛下と手を結ぶ必要は無かっただろう。

よって、リヒテンラーデ侯を交渉相手としても、残る2人から強硬に反対されれば、リヒテンラーデ侯がそれを跳ね除けられる可能性は少ない。まして、同侯は皇帝の意向を背景に、万事、先例重視で国政を処理していく、調整型の政治家だった。そんな彼が皇祖ルドルフ大帝以来の国是に変更を迫るが如き、国政方針の大転換を敢えて行うとは全く想像できない。

対して、ブラウンシュヴァイク公・リッテンハイム侯の強みは、何よりも、今上帝の血を引く実の娘を擁しているという点。それは、今上帝フリードリヒ4世崩御後、自分の娘を帝位に就ける事が出来れば、自分は皇帝の父親、皇父として、帝国の実権全てを掌握する事を意味する。例えるならば、ルドルフ大帝の後継者、強堅帝ジギスムント1世の実父、ノイエ・シュタウフェン公ヨアヒムが帝国宰相として、国政全般を指揮したように。

シトレ派が帝国政界の実態をどこまで認識していたのか、現時点で

は詳らかにしない。だが、上述の内容をある程度まで知悉していたとするならば、彼らシトレ派は和平交渉の相手として、ブラウンシュヴァイク公、リッテンハイム侯、彼らのどちらかを想定したであろう事は想像に難くない。そして、前述したラーケン少佐の存在を考慮するならば、シトレ派とブラウンシュヴァイク公との関係は、イゼルローン要塞攻略戦の前から生じていたのではないか。

筆者がこう考える理由こそ、本論冒頭で述べた問題意識「同盟軍人ヤン・ウェンリーがブラウンシュヴァイク公ら旧王朝の門閥貴族に対し、軍事指導を行える立場にいた事、そして、あの高慢なる貴族達がその指導を受け入れると確信していた事」の解答に繋がるのだ。以下、ブラウンシュヴァイク公爵の事情について解説したい。

こと政治交渉において肝となるのは、双方の利害得失の調整、妥協点を如何に見出すかだ。双方とも、自分の利益を最大化し、損失を最小化しようと動くのは当然。だからこそ、何が自分にとって最大の利益をもたらすかを把握し、それ以外の部分は交渉材料として、相手側に譲歩する事も必要になる。

シドニー・シトレとブラウンシュヴァイク公オットーが交渉のテーブルに着いたと仮定した時、まず双方にとって最大の利益とは何だろうか？

シトレにとっては、自派主導による帝国和平の実現、その功績を以て、同盟内での軍部の地位向上を図り、少なくとも政治と軍事を対等にする事だろう。そして、ブラウンシュヴァイク公が狙う最大の利益は、自分の娘エリザベートを帝位に就け、自分が新帝の父、皇父となって、帝国の実権全てを掌握する事に他ならない。

以下、ブラウンシュヴァイク公オットーの思考の軌跡を同公の独白としてまとめてみた。

…儂の娘エリザベートを帝位に就ける上で、最大の障害となるのは、儂と同様、皇帝の血を引く娘を持ち、儂に匹敵する権勢を有するリッテンハイムだ。手段さえ確保できれば、リッテンハイムと娘サビーネ、この父娘を殺し、リッテンハイム家を族滅する事を躊躇いは

しないのだが。
だが、肝心の手段が無い。我がブラウンシュヴァイク公爵家の私設艦隊を率いて、リッテンハイム侯爵家を攻撃する事は、物理的には不可能では無い。
だが、リッテンハイムが何もせず、ただ攻撃を受ける訳は無い。あの若造カストロプ公マクシミリアンでさえも、帝国政府から財産を没収されようとしただけで、私兵を率いて反乱を起こす事を躊躇わなかったのだ。リッテンハイムは必ず、私設艦隊を率いて迎撃するだろう。そして、濫りに私戦を起こした反逆者だと言い立て、儂を帝国政府に訴えるに違いない。
勿論、枢密院議長である儂の権力を以てすれば、リッテンハイムの一門に属する貴族家を恫喝するか、或いは因果を含めて、リッテンハイムが反逆を企んでいたと告発させて、皇祖ルドルフ大帝陛下がお定めになった大帝遺訓・第十条「もし仮に、皇帝と帝国に異心を抱く貴族が現れたならば、皇帝の勅命を得て、他の者が必ず之を誅せよ」を名分として、奴を征伐する権利を得る事は出来る。先年、皇帝の弑逆を企てた、あのクロプシュトック侯ウィルヘルムを征伐したようにな。
しかし、それはリッテンハイムも同じなのだ。奴は枢密院副議長、その一門に属する貴族家も数多ある。我が一門に不心得者が皆無かと問われれば、いないと断言するほど儂は愚かではない。
畢竟、儂とリッテンハイムが直接的な武力行使をしないのは、例え勝っても、自家の損害が無視できないほど大きくなると予想されるからに過ぎない。
地球時代、当時の大国同士が核兵器を大量に保有して対立していたが、とうとう滅亡するまで、両国とも核の発射ボタンを押す事は無かったと聞く。儂とリッテンハイムの関係もそれに近いのだ。どちらかが口火を切れば、相手の息の根を完全に止めるまで戦わざるを得ない。何故なら、皇帝の玉座は1つしかないからだ。
そして、そうなると、あの忌々しい古狸、国務尚書リヒテンラーデが介入してくる事は間違いない。奴の行動原理は、皇帝の意向を盾に

取って、儂ら領主に対して、帝国政府、即ち文官貴族の優位を確立する事にあるのだからな。

武力と経済力を持たぬ奴自身は取るに足りんが、皇帝を擁し、国璽を保有している事実は大きい。儂らが十分に傷つけあった頃合を見計らって、儂らを逆賊と名指しする勅命を発し、宇宙艦隊司令長官のミュッケンベルガーか、もしくはあの小憎らしい金髪の孺子あたりに命じて、帝国正規軍を動かすやもしれぬ。流石に我が艦隊と雖も、リッテンハイム軍と戦いつつ、正規軍を撃退するような離れ業は不可能だ。

まず儂が求めるものは、我が公爵家軍に代わり、リッテンハイム軍を討滅できるだけの戦力を持つ軍隊だ。リヒテンラーデが政府を牛耳っている以上、正規軍を動かそうとするのは現実的ではない。奴を追放、ないし暗殺して、その後釜に儂の息がかかった貴族を据えるという手もあるが、流石に現職の尚書に手を出せば、帝都の文武官が黙ってはおるまい。あの高慢ちきなベーネミュンデ侯爵夫人、あの女が孕んだ赤子を殺させた時とは訳が違うのだ。

やはり、あれしかない。叛乱軍の手を借りるのは業腹ではあるが、背に腹は代えられぬ。叛乱軍を帝国領内に導き入れ、奴らにリッテンハイム侯爵領を攻撃させて、ウィルヘルムとサビーネ、いやリッテンハイムの一族を皆殺しにさせ、領地を徹底的に破壊させるのだ。二度と復活などせぬように。そして、リッテンハイム一門の貴族家への見せしめとしてな。

完全に筆者の想像だが、ブラウンシュヴァイク公の脳裡に浮かんだ考えがこうだったとすれば、彼が臣下となったラーケン少佐を通じて、同盟軍シトレ派から持ち掛けられた和平交渉に、内々に応じる気になっても不思議ではない。和平に応じる代わりに、同盟軍の武力で政敵リッテンハイムを滅ぼし、娘エリザベートを帝位に就ける事が出来れば、十分に引き合うと計算するだろう。

そもそも、ブラウンシュヴァイク公、そして当時の領主貴族達は、帝国貴族との立場上、同盟人を叛徒と罵り、フェザーン人を拝金主義者

と軽蔑していたが、本心では彼らを滅ぼしたいなどとは思っていなかったはずだ。

何故なら、分国令以降に台頭した彼ら新興領主達の力の源泉は、フェザーンを介した同盟との三角貿易だったからだ。彼らの富の大部分はフェザーン、そして同盟から得られたものだった。貪欲なブラウンシュヴァイク公にとって、フェザーンと同盟、この「金の卵を産む二羽の鵞鳥」を絞め殺す事などしたくも無かっただろう。

さらに前述した通り、フェザーンや同盟との関係強化を図りたい、側近のアンスバッハやシュトライトも、主君の考えを後押ししたに違いない。

同盟軍にリッテンハイム侯爵領を攻撃してもらうためには、当たり前だが、帝国領への侵攻路がなければならない。フェザーン回廊は駄目だ。フェザーン自治領政府が同盟政府の国債を大量に引き受けている以上、フェザーンの経済力が失われれば、同盟は財政破綻しかねない。

また、フェザーン政府から多額の賄賂を貰っているだろう同盟の政府高官がフェザーンへの侵攻を了承するはずもない。さらに、帝国との和平交渉の材料になり得る、圧倒的な軍事的勝利を挙げるというシトレ派の目標も達成できない。

そして、ブラウンシュヴァイク公もフェザーン企業と取引、多額の投資をしている関係上、フェザーンの経済を破壊する事を望みはしないだろう。

では答えは1つしかない。イゼルローン回廊しかないのだ。つまり、ヤン艦隊によるイゼルローン要塞攻略とは、ブラウンシュヴァイク公に和平を認めさせる見返りに、同盟軍がリッテンハイム侯爵領を攻撃するためのルート確保だった、これが筆者の着想である。

こう考えてくると、イゼルローン要塞攻略時、帝国軍務省データベースに登録されていない、恐らく貴族艦隊所属の軽巡洋艦が用いられた理由が理解できる。

この巡洋艦はブラウンシュヴァイク公の私設艦隊に属する艦艇で、攻略作戦に先立ち、フェザーン回廊経由で同盟に送られた、または要

塞主砲の射程外で、密かに公爵家の艦隊からヤン艦隊に引き渡されたのだろう。

そして、シェーンコップが所持していたラーケン少佐のＩＤカードも、同盟で偽造されたものではなく、帝国軍務省が発行し、ブラウンシュヴァイク公爵家が裏書きした、正真正銘の本物だった可能性が高い。また、同公爵家の家臣になったラーケン少佐の協力が得られるならば、指紋や網膜、虹彩パターンに遺伝子配列など、彼本人の生体情報も入手できただろうし、それらを駆使した欺瞞方法（例えば、虹彩パターンを印刷したコンタクトレンズなど）を用意する事も不可能ではない。

ヤン艦隊によるイゼルローン要塞の無血攻略は、帝国最大の貴族・ブラウンシュヴァイク公オットーの協力があって初めて実現できたのだ。これが筆者の見解である。

第１４節　異説・ヤンは冷徹なマキャベリストだった？

ブラウンシュヴァイク公にとって、同盟との和平で失うものよりも、得るものの方が遥かに多かった。得るものは、新帝の皇父という地位と名誉、帝国の実権全て、対フェザーン・同盟貿易の独占、政敵リッテンハイムの首、さらに国務尚書リヒテンラーデや帝国軍三長官、金髪の孺子ことラインハルト陛下、自分が気に食わない者達は悉く追放、処刑さえ出来るのだ。

対して、失うものと言えば、帝国が全宇宙、全人類社会を統治する唯一の政体であるとの体面、イゼルローン要塞と回廊の通行権、自家の一門に属する武官貴族シュトックハウゼンの身柄、そして、仮にこの事が公になった場合、帝室に弓を引く叛逆者になってしまう危険性、これくらいだろう。

しかし、同公にとって、これらを失っても、大して痛痒には感じないだろう。自身が欲するのは、あくまで帝国の支配権であり、同盟やフェザーンなど、事実上の外国がどうなろうと、所詮知った事ではなかった。

また、自身が擁立した、義父でもある皇帝フリードリヒ４世の無能惰弱ぶりを長年見せられている同公には、銀河帝国皇帝は神聖不可侵など、戯言にしか聞こえなかった。帝室に敬意を払えないとの点では、先年、自分自身が血祭りにあげた、クロプシュトック侯ウィルヘルムと、全く同じ心境だっただろう。必然的に、帝国皇帝が体現する銀河帝国の国是、体面など「どうでも良い事」だったはずだ。

そして、イゼルローン要塞を同盟の手に渡してしまえば、帝国は同盟を攻める事は不可能となるが、同公は同盟を滅ぼす気など毛頭無く、これからも「商売相手」として、末永くお付き合いさせて頂きたい存在だった。また、シュトックハウゼンの如き無能者がどうなろうと、同公にとっては論評にも値しない些事だっただろう。

しかし、娘エリザベートが即位し、自身が帝国の実権全てを掌握す

るまで、和平が公になる事は避けるべきだった。約５００年に及ぶゴールデンバウム朝の歴史は重く、皇祖ルドルフ大帝の定めた国是―全宇宙は遍く銀河帝国の支配する領域である―に、真っ向から異を唱える同盟との和平交渉など、一朝一夕に受け入れられるものではないからだ。

ブラウンシュヴァイク公もそれは理解できていた。故に、イゼルローン陥落後、同盟との和平交渉は秘密裏に、時間をかけて行い、あわせて枢密院議長との立場を用いて、貴族社会中に賛同者を増やしていく、それが同公の心算だった。その事は同盟側、シトレ派も了解していただろう。

よって、ロボス派が持ち出した帝国領侵攻作戦が、シトレ派の勢威を恐れた政治家の賛同と、あくまで対帝国戦争の完遂を求めるグリーンヒル一派の裏切りにより、最高評議会で可決してしまった事は、これからブラウンシュヴァイク公との和平交渉を進めようと考えていたシドニー・シトレにとって、将に生涯の痛恨事と言えた。

そして、開祖ラインハルト陛下とオーベルシュタイン元帥が企図した焦土作戦によって、同盟軍が全軍の約７割を喪失する大惨敗を喫した事は、ブラウンシュヴァイク公に「同盟軍恃むに足らず」と、和平交渉を見限らせるに十分だった。

さらに、同盟軍の撤退と前後して、皇帝フリードリヒ４世が崩御、同帝が後継者を定めぬまま死んだ事で、帝位継承を巡る争いは激化した。ブラウンシュヴァイク公、リッテンハイム侯、リヒテンラーデ候、同盟との和平交渉相手となれる可能性を持つ３人の権力者は、それぞれ意中の後継者候補を擁立して、政治工作に狂奔した。

そして、武力も経済力も無い、ただ政界に巣食うだけの老政客と見下していたリヒテンラーデ候が、成り上がり者の金髪の孺子こと、ラインハルト陛下と結び、帝位から最も遠いはずだったエルウィン・ヨーゼフを即位させてしまった事で、敗北感と屈辱感に塗れたブラウンシュヴァイク公は理性を放擲。何としても、あの憎き老い耄れと金髪の孺子の首を取らずにはおれぬ！と、政敵リッテンハイムと同盟するという奇策で、４０００家近い貴族家を結集したリップシュタット

盟約を成立させた。
　もはや同盟と和平を結び、その武力を利用して、政敵リッテンハイムを滅ぼすという、当初の構想など、遠く銀河系の果てに消え去ってしまった。歴史にｉｆは無いが、もしロボス派が帝国領侵攻作戦を提出せず、帝国皇帝フリードリヒ４世が後数年、その生命を保つ事が出来たならば、或いは、ゴールデンバウム朝銀河帝国第３７代皇帝エリザベート1世、皇父にして帝国宰相ブラウンシュヴァイク公オットー、最高評議会議長兼統合作戦本部長シドニー・シトレ元帥、国防委員長兼宇宙艦隊司令長官ヤン・ウェンリー大将、彼ら４名がイゼルローン要塞の大ホールで、銀河帝国と自由惑星同盟の相互不可侵を明記した和平条約に調印する光景が見られたかもしれない。
　以上の着想、妄想を前提とする事で、当初の問題意識、同盟軍人ヤン・ウェンリーが何故、ブラウンシュヴァイク公ら旧王朝の門閥貴族に対して、軍事指導を行う事が出来て、かつ貴族達がその指導を受け入れると確信していたのか、その問いに答えられると思うのだ。前述した事の繰り返しを交えつつ、以下の通り整理してみた。
　帝国暦４８２（７９１）年、練達の諜報員だった帝国軍人ラーケン少佐がフェザーン自治領・高等弁務官府駐在武官として赴任。彼は職務上、同盟軍情報部とも水面下で接触、当時の同盟軍で勢力を伸ばしていたシトレ派、その領袖シドニー・シトレや、御曹司的存在のヤンから、その存在を認識されるに至る。
　その後、ラーケン少佐は同盟軍の調略を受け、逆スパイとなる。帝国軍の軍事機密を同盟軍に流すと同時に、その職務で知り得た同盟やフェザーンの情報をブラウンシュヴァイク公爵家にリークし始めた。彼が公爵家と接触、同家の為に暗躍するようになったのは、当時、ブラウンシュヴァイク公に仕えていたフェルナーの紹介、そして同公の側近アンスバッハやシュトライトの意向があった。
　帝国暦４８５（７９４）年の第６次イゼルローン要塞攻防戦で、同盟軍が全面撤退を余儀なくされた事を皮切りに、ロボス派領袖ラザール・ロボスほか、同派所属の前線司令官達は失態を続け、さらに幹部ホーランドが戦死するなど、その勢威は低下する一方だった。

その反面、対立派閥のシトレ派は、ビュコック、ウランフ、そしてヤン達が武勲を重ね、世論の高い支持を背景に、その勢力は同盟軍を席巻する勢いだった。

そして、同派領袖シトレが統合作戦本部長に就任して以降、シトレと彼直系の軍人―ビュコック、ウランフ、ヤン達―は、自派主導による対帝国和平の実現を模索。逆スパイとして確保していたラーケン少佐のコネクションを使い、帝国最大の門閥貴族ブラウンシュヴァイク公オットーとの接触を密かに開始したと見られる。

今上帝フリードリヒ４世の孫に当たる、息女エリザベートを帝位に就ける事を熱望する同公は、自身と同様、皇帝の孫を娘に持ち、自らに匹敵する経済力と武力を有するリッテンハイム侯ウィルヘルムを敵視。同侯を抹殺するため、同盟軍シトレ派と水面下で接触、同盟との和平交渉に応じる見返りに、同盟軍をしてリッテンハイム侯爵領を攻撃、破壊させるとの構想を描く。

ブラウンシュヴァイク公オットーは自らの構想実現を策して、同盟軍を帝国領内に導き入れる侵攻路を確保するために、そしてシトレは、対帝国戦で圧倒的な軍事的勝利を収めて、その武勲によって同盟軍を完全に支配、さらに今後の対帝国和平交渉を有利に導ける材料を得るために、両者の目論見の一致点として、ヤン艦隊によるイゼルローン要塞攻略が計画された。

ブラウンシュヴァイク公爵家の有形無形の支援に助けられて、シトレ、そしてヤンの計画通り、イゼルローン要塞の無血陥落という、同盟史上、最大級の武勲を上げるに至る。

イゼルローン陥落直後、両者は今後、数年間をかけて、水面下で和平交渉を繰り返し、両国内に和平の機運を高めると共に、同盟軍はブラウンシュヴァイク公との約定通り、イゼルローン回廊を通過して帝国領に侵攻、暴虐な領主に抑圧された人民を救出、解放するとの大義名分を掲げるが、その実、ブラウンシュヴァイク公所有の艦隊と密かに合流、航路情報の提供と補給支援を受けて、一路リッテンハイム侯爵領に進撃。侯爵家が保有する艦隊を撃破し、同侯ウィルヘルムと娘サビーネを殺害、ないし捕虜として、同盟領に帰還。同侯爵家を滅亡

させて、ブラウンシュヴァイク公の息女エリザベートが次期皇帝となる上で、最大の障害を取り除く…

しかし、現実は構想通りには進まなかった。シトレ派の独走を防ぎ、失地回復を図りたいロボス派は、政治と軍事が対等である事を志向するシトレ派を放置しておけば、同盟軍が「国家内国家」と化し、それは民主共和国家・自由惑星同盟が軍部独裁国家へと変貌する機縁になるのではと恐怖した政治家、官僚、財界人らと結び、帝国領侵攻作戦を最高評議会に提出、対帝国戦争の完遂を求めるシトレ派内の非主流派グリーンヒル一派の造反にも助けられて、帝国領侵攻作戦が正式に決定してしまう。

当初の構想を捨てきれないシトレは、腹心キャゼルヌを後方主任参謀に据えると、故意に補給を滞らせて、前線の戦闘力を喪失させ、前線司令官に据えた自身の直系ビュコック、ウランフ、ヤン達に、その状況を針小棒大に報告させて、撤退止む無しの状況を作り出す事で、同盟軍の早期撤兵を策したが、開祖ラインハルト陛下とオーベルシュタイン元帥が企図した焦土作戦が奏功し、故意のサボタージュをせずとも、同盟軍の補給体制は崩壊、前線に展開する各艦隊の戦闘力は失われた。

しかし、出兵に賛成したウィンザー夫人ら主戦派政治家は、勝利なき撤退は自身の政治生命を失わせかねないと、市民に説明できるだけの勝利を挙げるまでは撤退すべきではないと強硬に主張。撤退の機を失ったまま、ラインハルト陛下が率いる帝国軍の精鋭が急襲、同盟軍は壊滅し、全軍の約7割を喪失するという歴史的敗北を喫した。

帝国侵攻作戦を提案したロボス派、同派と野合したグリーンヒル一派は戦犯として世論の激烈なバッシングに晒され、ウィンザー夫人ら主戦派政治家と共に失脚したが、制服軍人トップの統合作戦本部長シトレもその責任を免れず、辞表を提出。ロボスは自身の失敗によって、ライバル・シトレの足を引っ張った、と評された。

その影響は当然、政界にも及び、侵攻作戦を可決したサンフォード政権は崩壊。議長以下、全委員長は辞表を提出したが、出兵反対に票を投じた国防委員長トリューニヒト、財務委員長レベロ、人的資源委

員長ホワンらは留任。そして、トリューニヒトはサンフォードとの秘密協定の結果、暫定議長に就任した。

歴史的大敗北を喫した同盟は挙国一致体制を取り、この国難を乗り越えねばならないと主張する議長トリューニヒトは、名目上は派閥解消、人事刷新のため、その実、同盟軍への影響力強化を策して、シトレ・ロボス両派に属さない、中間派の第1艦隊司令官クブルスリーを統合作戦本部長に推薦。アムリッツァ会戦で領袖シトレ・ロボスが失脚した両派に、世論の期待と支持を集めるトリューニヒトに抗する力は無かった。シトレ派は自派の重鎮、ビュコックを宇宙艦隊司令長官に推薦し、辛うじて実戦部隊のみ自派の影響下に置く事が出来た。

そして、同盟の大敗北は、ブラウンシュヴァイク公から、同盟との和平交渉を行う意欲を失わせるに十分だった。加えて、皇帝フリードリヒ4世の崩御により、政敵リッテンハイム侯、そしてリヒテンラーデ・ローエングラム枢軸との権力闘争に集中しなければならなくなった同公の脳裡からは、同盟の存在は既に消えてしまっていた。

だが、先の問題意識と関連付けるならば、アスターテ星域会戦後、ヤンはブラウンシュヴァイク公とのチャンネルをまだ活かす事が出来ると考えていたのではないだろうか。

だからこそ「門閥貴族軍と連合し、ローエングラム侯の軍を打ち破った後、返す刀で貴族軍を撃つ」、或いは「門閥貴族軍に策を授けて、ローエングラム侯の軍と互角に戦わせた後、両軍が疲弊の極に達した所を撃つ」、シトレ元帥の後継者的存在となった自分ならば、貴族連合軍の盟主・ブラウンシュヴァイク公も、これらの戦略に耳を貸してくれると確信していた、これが筆者の着想である。

尤も、後世からの視点では、この当時、ブラウンシュヴァイク公は同盟との和平に期待せず、政敵リッテンハイムと同盟してまで、リヒテンラーデ・ローエングラム枢軸の打倒に執念を燃やしていたので、ヤンから密かな連絡を受けても、一顧だにしなかった可能性は高いが。

しかし、この着想には難点がある。もしヤンがこの戦略を取るべきだと考えていたならば、ヤンの最終目的は、自身が常に口にしていた

帝国との和平ではなく、あくまで同盟が帝国を滅ぼす事だったと言わざるを得ない。

また、この戦略を採用すれば、結果的に和平交渉の相手・ブラウンシュヴァイク公を裏切り、騙し討ちする事になる。ヤンの養子で、その為人を最もよく知るだろうミンツ氏は、ヤンが戦争を嫌悪し、平和を求め続けた高潔な人物だったと、著作中で何度となく強調している。和平交渉の相手に詐術を弄し、冷酷に攻め滅ぼす事を躊躇わないヤンの考えは、ミンツ氏の描くヤン像とは乖離し過ぎている。

この矛盾に整合性を与えられる解釈はあるのだろうか。結論から述べると、ヤンはミンツ氏が描いているような、戦争を嫌って、平和を求め、「ペンは剣よりも強し」を真理と信じる人物ではなく、軍事力行使の正しさを疑わず、平和実現のためには、ペンよりも剣が有効だと信じ、武力や政治力に裏打ちされない言論に価値を見出さないマキャベリストだった、これが筆者の見解である。

以下、イゼルローン要塞司令官就任後から、バーラトの和約締結まで、ヤンの言動を分析しつつ、その事を論じてみたい。

第15節　ビュコックに求めた命令書の謎

前節の続きになるが、ヤンが開祖ラインハルト陛下とブラウンシュヴァイク公ら貴族連合との内戦に介入すれば、同盟が帝国を滅ぼす事が出来ると確信していたならば、何故、行動に移さなかったのだろうか？

ミンツ氏の著作では、それは民主主義国家の軍人の矩を超える、銀河連邦を崩壊させた独裁者ルドルフ大帝への道だと自覚する、ヤンの民主主義者としての高潔さと強固な自制心の故だとしているが、これまで述べてきたように、ヤンは政治と軍事が対等であるべきと考えるシトレ派のプリンス的存在で、同派領袖シトレ元帥の御曹司的人物だった。よって、独裁者こそ志向しなくても、軍人が国防戦略、対帝国戦略を主導する事を躊躇う事は無かったと考えられる。

ここから、ヤンが帝国の内戦に関与しなかったのは、思想信条上の自制が原因だったとは思えない。

また、帝国からの視点では、アムリッツァ星域会戦後からリップシュタット戦役勃発時までの間に、貴族連合との戦いを決意したラインハルト陛下が、同盟が帝国の内戦に関与する事が無いよう、旧同盟軍人アーサー・リンチを工作員として、同盟内部での軍事クーデターを使嗾、同盟を内戦状態に陥れた事が、ミッターマイヤー首席元帥ほか、当時ラインハルト陛下の麾下に属した高級軍人の証言で明らかになっている。

その結果、ヤンは帝国に関与する余裕が無く、自国の内戦鎮圧に奔走せざるを得なかったと言われる。結果論的に言えば、確かにその通りだろう。

しかし、ミンツ氏の著作によれば、ヤンはラインハルト陛下の謀略を看破しており、同盟内部で近く、クーデターが生じる事を予見していた。そのため、宇宙艦隊司令長官ビュコックと密かに接触、クーデター勃発の可能性を伝え、水面下でクーデター派を捜索、拘禁して、クーデターを未然に防いで欲しいと依頼。それと同時に「叛乱がおきたら、それを討ち、法秩序を回復するように」との命令書を発して欲

しいと依頼して、自身がクーデターに参加した同盟軍を鎮圧する際の法的根拠とし、独断で軍を動かしたと、後日責任を追及される事がないように手を打っていた、と云う。

もしこれが事実であるならば、ヤンは帝国での内戦―ラインハルト陛下とブラウンシュヴァイク公ら貴族連合との戦闘―が生じる事をかなり早い段階から予見していた事になる。だとすれば、その対策がビュコックへの密かな忠告だけというのは、あまりに手薄ではないだろうか。ビュコックに対処を依頼して、後は全て任せる的な態度に思えてならない。アムリッツァでの敗北後、影響力を大きく減退させたとは言え、今やシトレ派の輿望を担う立場のヤンならば、より有効な対策が打てたのではないだろうか。

ミンツ氏の著作からは、クーデター派の動きが速すぎたため、ビュコックの対応は間に合わず、結局ヤンがクーデターの鎮圧に乗り出さざるを得なかったと、恰もビュコックの不手際、彼に責任があるかの如き記述になっているが、これはビュコックに対して、厳し過ぎる見解だろう。周知の如く、彼は兵卒から提督にまで上り詰めた、将に叩き上げとの言葉を体現する、生粋の軍人だった。この点はミンツ氏も触れているが、この老提督に憲兵の如き仕事を求めるなど、これは依頼する側に問題なしとは言えない。

これもミンツ氏の見解だが、ヤンは軍中央に人脈を持たず、また当時の同盟軍はトリューニヒト派の天下で、ヤンが信頼できる中央の軍人はビュコックしかいなかったため、としているが、筆者はこの見解には首肯できない。

前述した通り、ヤンは、かつて同盟軍を席巻したシトレ派の幹部で、領袖シトレの御曹司的存在だった。また、そのシトレの腹心キャゼルヌも、この時期、ヤンの招請に応じてイゼルローンに着任、要塞事務監に就任している。中央勤務が長く、エリート街道を歩んでいたキャゼルヌが軍中央に人脈を持っていないとは思えない。彼の人脈を用いて、軍内部の監査部門や憲兵隊に影響力を行使する事も出来たのではないか。

さらに言えば、ヤン自身が当時の同盟軍では事実上のナンバー3

で、その権力と地位に惹かれて、ヤンの意向に迎合しようとする軍人も多かったのではないだろうか。

そして、ビュコックとの関係では、より大きな疑問がある。ヤンは何故、彼に「叛乱がおきたら、それを討ち、法秩序を回復するように」との命令書を求めたのか、そして、彼は何故、それを了承したのか、この2点が筆者にはどうしても理解できない。

筆者は同盟の政府・軍組織には明るくないが、それでも常識的に考えて、宇宙艦隊の長とは実戦部隊の指揮監督を責務とする者で、国内の治安維持、或いは軍内の秩序維持、軍組織の監察にまで、権限を有していたとは思えない。

上記の任務について、帝国の政府、軍組織で言えば、宇宙艦隊司令長官は実戦部隊の指揮監督が職務で、統帥本部総長が軍内の秩序維持に責任を持ち、軍務尚書が軍組織の監察に当たっていた。そして、国内の治安維持は、内務省の社会秩序維持局と警察局、そして軍務省に属する憲兵隊の仕事だった。

また、一例を挙げると、亡国帝フリードリヒ4世の治世末期、叛乱を起こしたカストロプ公マクシミリアンを故キルヒアイス大公が討伐した際の事。当時、同大公は開祖ラインハルト陛下の元帥府に属する軍人だったが、ラインハルト陛下は国務尚書リヒテンラーデ侯の政務補佐官ワイツに賄賂を贈り、大公に叛乱討伐の勅命が下るよう、リヒテンラーデ侯への工作を依頼した事がある。この時、ラインハルト陛下は宇宙艦隊副司令長官として、宇宙艦隊の半数を指揮下に置いていたが、それでも区々たる地方叛乱を討伐する為に、わざわざ皇帝の勅命が必要だったのだ。

つまり、ある領主貴族が反乱を起こしたからと言って、宇宙艦隊司令長官が独断で命令を下し、隷下の宇宙艦隊を出撃させたならば、法と皇帝の権威を犯す、明確な越権行為だとして、軍組織上、上官に当たる統帥本部総長、軍務尚書からの譴責は当然だった。

さらに、妄りに軍隊を動かしたとして、司法省から弾劾されて、かつ皇帝の意向によれば、懲罰、免職、いや処刑さえあり得た。それほど、軍の動員とは国家にとっての重大事で、支配体制を揺るがしかね

ない影響力を持つので、慎重に決定される必要があった。それは政体、国体に関わらず、国家組織の「常識」ではないだろうか。

まして、帝国のように人治ではなく、法治国家と標榜し、政治家による軍隊の統制、所謂シビリアンコントロールを大原則とする同盟で、実戦部隊の長が独断で、かつ秘密裏に軍隊を、それも当時の同盟国内で最大の武力を有する部隊の出撃許可を出すなど、命令を発したビュコック、その命令に従ったヤン、この事が明らかになったならば、両名とも軍法会議で裁かれる事は疑い得ず、国家反逆罪、或いは騒乱罪で実刑判決を受けても当然と言える、重大な犯罪行為ではないのだろうか。

しかるに、ヤンから密かに依頼を受けたビュコックは、その事を叱責もせず、素直に命令書を作成し、ヤンの下に届けさせている。ヤンはクーデター鎮圧のため、イゼルローン要塞出撃後、幕僚たちにビュコックの命令書の存在を明かして、法的な根拠を得ているのだから私戦ではないと言い切り、幕僚たちは、ミンツ氏の表現を借りるならば「司令官の予見力に声もなかった」と、感嘆している様が読み取れるが、彼らは本当に高等教育を受けた高級軍人なのだろうか。

若手軍人から「歩く小言」と、半ば親しみを込めて揶揄され、秩序に人一倍厳しかったと言われる参謀長ムライは何故、越権行為で、しかも秘密裏に作成された命令書に法的根拠など認められないと、司令官ヤンを諫めなかったのか。

また、ヤンの副官フレデリカ・グリーンヒルは同盟憲章と同盟軍基本法の全条文を悉く諳んじていた才女だと称賛されているが、ただ条文を機械的に覚えているだけで、それが指し示す意味など全く理解できていない、単なる暗記機械でしかなったのではないかと、深刻に懐疑せざるを得ない。

権限を持たない者が秘密裏に作成した命令書を根拠として、法秩序を回復する為に行動するなど、出来の悪い笑劇を見せられている気分だ。いや、専制国家に生まれ育った筆者には、この光景は旧帝国史で屡々繰り返された、国家を壟断する権臣を処断、追討するため、帝室の忠臣が時の皇帝の密勅を部下たちに披露し、皇帝陛下の御為、いざ

奸臣を誅殺せん！と、決起を求めるシーンに酷似していると思えてならない。

第16節　イゼルローン要塞司令官は「パエッタ・ドーソン」コンビが適任？

以下は、管見の限りで裏付けとなる史料は存在せず、あくまで筆者の着想、妄想レベルの見解なのだが、ヤンは帝国の内戦に介入すれば、銀河帝国を滅ぼせると確信しながら、何故、それを行わなかったのか、それは単に、開祖ラインハルト陛下の策謀に屈しただけだったのか、さらに明白な越権行為であるビュコックの命令書、これに関わった者達が誰も疑問を抱かず、それを是認しているのは何故なのか、これらの疑問に答えつつ、ヤンの為人を「冷徹なマキャベリスト」と主張する筆者の考えについて解説したい。

まず、前述の問題を考察する上で、注意すべきと思われるのは、アムリッツァ星域会戦後にヤンが任命された地位だ。ヤンは戦後、イゼルローン要塞司令官兼駐留艦隊司令官のポストに就いているが、同盟軍最高の名将ヤンが国防の最前線を守護する任務に就くのは当然だと、例えばミンツ氏などは一切の疑問を抱いていないが、一点の事実を無視していると言わざるを得ない。当時、解散総選挙を経て、正式に最高評議会議長に就任したトリューニヒトの存在だ。

トリューニヒトは対帝国戦を聖戦と鼓吹する主戦派政治家で、自派主導の対帝国和平を目指すシトレ派のプリンス的存在のヤンとは政治的には遠かった。

後年、イゼルローン要塞を離任し、フェザーン駐在弁務官事務所付武官への赴任を命じられたミンツ氏は、新任の挨拶を兼ねて、首都星ハイネセンで宇宙艦隊司令長官ビュコックと面談した事実を書き記しているが、その席上、イゼルローン要塞に駐留するヤン艦隊が政府の統制を離れて、軍閥化する事を恐れたトリューニヒト派が、ヤン艦隊から有能で司令官に忠実な軍人たち―キャゼルヌやシェーンコップら―を遠ざける事を策しており、自身の人事がその一環だという見解を聞かされているが、あまり首肯できる内容ではない。

確かに、一般論で言えば、地方に駐屯する部隊の司令官と部下達が

個人的な信頼関係で結ばれ、司令官の私兵と化し、軍閥化する事を防ぐため、中央政府は人事権を行使して、部隊の中心メンバーが固定化しないようにする、これは政体を問わず、あらゆる国家が腐心してきた問題である事は間違いない。

だが、前述した通り、ヤンがイゼルローン要塞司令官兼駐留艦隊司令官に任命された時、トリューニヒトは最高評議会議長の地位にいた。さらに、帝国領出兵作戦に反対した事で、市民からの支持も高かった。

もし、ビュコックが指摘するように、トリューニヒトがヤン艦隊の軍閥化を懸念していたならば、何故、国境地帯に位置する難攻不落の要塞に、ヤンが子飼いの部下と艦隊を率いて赴任する事を許したのだろうか？

さらに、ヤンのイゼルローン要塞司令官任命が正式決定する前、統合作戦本部長クブルスリーは幕僚総監への就任を望み、宇宙艦隊司令長官ビュコックは同艦隊総参謀長の地位を用意すると言明している。もし、本当にトリューニヒトがヤンの軍閥化を恐れていたならば、わざわざ独立してくれと言わんばかりの好条件が揃った、かつ政府の目が届き難いイゼルローン要塞に赴任させずに、クブルスリーまたはビュコックの提案に乗って、軍中央での勤務を命じるべきだったのではないか。

いや、アムリッツァで大敗した同盟軍には、ヤンほどの名将を中央の顕職に付ける余裕など無かった。少ない同盟軍が国防の実を上げるためには、どうしてもイゼルローン要塞への赴任が必要だったと、或いはミンツ氏なら反論されるかもしれない。しかし、それはイゼルローン要塞の防御力を過小評価、もしくはヤンの力量を過大評価していると言わざるを得ない。

そもそも、イゼルローン要塞が帝国軍の所有物だった時、要塞司令官と駐留艦隊司令官は同格の大将同士で、その不仲は伝統的でさえあったが、それでも第6次までのイゼルローン要塞攻略戦は全て失敗に終わり、帝国軍をして「イゼルローン回廊は叛乱軍兵士の死屍を以て舗装されたり」と豪語させている。

過去の帝国軍司令官は、決して無能ではなかったが、しかし極めて優秀でもなく、概して平均的な能力の持ち主だった。その彼らが互いの不仲というハンディキャップを負っていても、イゼルローン要塞は同盟軍の全面攻勢に耐え抜いている。

そして、視点を要塞陥落以降に移しても、リップシュタット戦役後、帝国の実権を掌握した開祖ラインハルト陛下は、貴族連合軍の拠点だったガイエスブルク要塞をイゼルローン回廊にワープさせ、同要塞の攻撃力と補給能力を用いた、ケンプ大将を司令官とする遠征軍を派遣しているが、新王朝開闢後、同盟側史料によって、当時のイゼルローン要塞には、司令官ヤンが不在だった事が分かっている。

ヤンは同盟政府が秘密裏に開いた査問会に拘束されており、遠征軍来襲時、イゼルローン要塞では軍官僚のキャゼルヌが司令官代理を務め、軍令面は参謀長ムライと副参謀長パトリチェフが補佐、要塞の防御指揮はシェーンコップが執り、駐留艦隊の指揮は客員提督メルカッツを始め、分艦隊司令官アッテンボロー、フィッシャー、グエンらが執るという、集団指導体制だった。

しかし、ヤン不在のイゼルローン要塞は帝国遠征軍とガイエスブルク要塞の猛攻に耐え、査問会から解放されたヤンが援軍を率いて帰還した事で、遠征軍は全軍の9割以上を失い、司令官ケンプ大将は戦死、ガイエスブルク要塞も破壊、完全敗北を喫した。

確かにこの指摘は結果論かもしれないが、ガイエスブルク要塞を擁した帝国遠征軍が襲来した時と同様の国防体制を提案した者は、アムリッツァ大敗後の同盟軍新体制を構築する際、軍部には全く存在しなかったのだろうか。

筆者のように、帝都オーディンから大艦隊が出撃していく様に親しんでいた者からすれば、軍事力は中央に集め、地方には必要最小限の軍事力のみを置き、外敵の襲来など、状況の変化に応じて援軍を派遣する、中央集権型の国防体制を取らない理由が何かあったのか、と感じてしまう。少ない軍事力の有効活用、そしてシビリアンコントロールの観点からも、こちらがより望ましいとさえ感じてしまうのだが。

そして、当時の同盟軍に、全く人材がいなかったとも思えない。ク

ブルスリーの統合作戦本部長就任に伴い、第1艦隊司令官の後任には、アスターテ星域会戦で負傷、加療中だったパエッタ中将が現役復帰の上、就任している。

パエッタは見敵必殺型の猛将タイプで、戦略的識見に欠け、柔軟性も無かったが、戦術家としては決して無能ではなかった。帝国暦４９０（７９９）年、開祖ラインハルト陛下が発動した同盟領侵攻作戦「神々の黄昏」で、宇宙艦隊司令長官ビュコック率いる同盟軍の一翼を担い、結果的に敗れはしたものの、寡兵で帝国軍の猛攻に耐え続けている。

アムリッツァ大敗後、もはや帝国領への侵攻など不可能になった同盟軍において、イゼルローン要塞司令官に求められる資質とは、まさにこの粘り強さ、敵の大軍が来襲しても、諦めずに戦い抜こうとする気概と、戦術的手腕では無かっただろうか。

軍政面に不安があるならば、クーデター勃発直前、救国軍事会議の一員になっていたフォークの凶弾に倒れたクブルスリーの後任となった統合作戦本部次長ドーソン、査問会当時は後方勤務本部長だったロックウェル、また第１４補給基地司令官に左遷中のキャゼルヌなど、軍官僚を補佐役に付ければよい。軍の階級から考えて、彼らの上位にパエッタを置く事が難しければ、ドーソンないしロックウェルを要塞司令官に任命して、パエッタを駐留艦隊司令官とする形もあるだろう。

そして、帝国軍の大規模な侵攻など、イゼルローン要塞だけでは対処が難しい事態が発生すれば、改めてヤンに命令し、首都ハイネセンに駐屯する第1艦隊、ないしは第１１艦隊を指揮させて、援軍として派遣すればよいのではないか？

さらに、派閥的な視点から言えば、パエッタはロボス派の一員で、国防委員長時代のトリューニヒトとは個人的に誼を結ぼうとするなど、議長トリューニヒトからすれば、ヤンよりも遥かに扱いやすい、かつ安全な人物だった。階級を無視して、能力面と派閥面からのみ考えれば、イゼルローン要塞司令官兼駐留艦隊司令官パエッタ中将、要塞事務監ドーソン大将、トリューニヒトにとっては、これが最良の人事

だったのではないだろうか？

以上の点から、ヤンのイゼルローン要塞司令官兼駐留艦隊司令官への就任には、不審な点が多すぎると言わざるを得ない。以下は全くの筆者の着想、妄想の類だが、一気に結論を述べるならば、この時、ヤンとトリューニヒトは密かに同盟を結び、それぞれの目的を達成するため、水面下で協力体制を構築していた、これが筆者の見解である。以下、節を改めて、その内容を詳述したい。

第17節　ヤンとトリューニヒトの秘密同盟～ヤンがイゼルローン要塞を欲した理由

まず、ミンツ氏の著作によれば、ヤンとトリューニヒトは互いに相容れないどころか、理解する事さえ出来ない関係で、ヤンは民主主義思想を重んじる自身の性向から、トリューニヒトを下品な扇動政治家を罵倒、さらには「私はあいつのシェークスピア劇風の演説を聞くと、心にジンマシンができる」と、生理的にも嫌悪していた、と云う。

しかし、ある史料によれば、アスターテ星域会戦後の慰霊祭で、反帝国演説を行う国防委員長トリューニヒトを衆人環視の前で手酷く批判した、後の代議員エドワーズが過激な右翼集団・憂国騎士団に狙われ、暴行されそうになった所を後輩アッテンボローと共に救出したヤンは、単身トリューニヒト邸を訪れて、エドワーズの身の安全を保障して欲しいと、トリューニヒトと直談判している。トリューニヒトもヤンの名声を考慮し、アスターテの英雄に貸しを作れるのなら安い買い物だと、その申し出を了承、自ら憂国騎士団員に指示して、エドワーズへの暴行を禁じている。

この史料の記述を採用するなら、ヤンとトリューニヒトは完全に没交渉だった訳ではなく、必要があれば直接交渉する事も辞さず、かつそれだけの人間関係はあった事が分かる。

故に、アムリッツァの大敗後、ヤンは単身、密かにトリューニヒト邸を訪れ、自身の政治目標を達成するため、トリューニヒトとの直接交渉に臨んだのではないか。かつて、憂国騎士団に狙われたエドワーズの身の安全を保障して欲しいと直談判した時の様に。

では、仮にそうだとして、この時、両者の間で何が話し合われて、何を申し合わせたのだろうか。ヤンとトリューニヒト、それぞれの立場を踏まえて、まとめてみたい。

まずヤンだが、彼は前統合作戦本部長シトレ元帥の御曹司的存在で、かつシトレ派のプリンス的存在として、今や同派の輿望を担う立場だった。同派幹部のビュコックは宇宙艦隊司令長官に就任したが、

彼は一兵卒からのたたき上げで、兵士や下士官、また下士官上がりの士官からは強く支持されていたが、反面、士官学校出のエリート軍人からは、武骨で粗野な戦闘屋だと敬遠されてもおり、彼らの支持は同じ士官学校出身のヤンに集まっていった。

アムリッツァの大敗で、同盟軍自体が世論の激烈なバッシングに晒されている今、必然的にシトレ派の勢力も地に落ちていたが、だからこそ却って、派閥の団結を取り戻し、往年の勢力を回復する為に努力を怠る事は出来なかった。状況を座視していれば、派閥自体が求心力を失い、雲散霧消する事は自明だったからだ。

シトレの腹心だったキャゼルヌが後輩ヤンの下で要塞事務監に就任する事を肯んじたのも、ヤンの招請に応じたとの面は確かにあるが、新たな派閥領袖たるヤンを身近で支えねば、との思いもあっただろう。

ヤンは立場上、自派主導による帝国和平の実現という、前領袖シトレの目標を掲げざるを得なかったが、同時に、もはやそれがほぼ不可能である事も理解していた。

シトレの時代とは異なり、同盟軍の過半はアムリッツァで消滅、イゼルローン要塞こそ確保しているが、再度の帝国領侵攻と占領を成し遂げられる戦力は既に無く、シトレが描いた「圧倒的な軍事的勝利を挙げて、それを交渉材料として、帝国との和平交渉を有利に導く」との戦略は取れなくなっていた。今の同盟軍に出来る事は精々、局地戦での勝利を重ねるくらいであり、帝国の内戦終結後に勝ち残った権力者、それはブラウンシュヴァイク公ら貴族連合か、それとも皇帝エルウィン・ヨーゼフ2世を擁するリヒテンラーデ・ローエングラム枢軸かは分からないが―ヤンは当然、後者だと予想していただろうが―、どちらが勝っても、弱体化した同盟からの和平交渉など、歯牙にもかけない事は火を見るよりも明らかだった。

故に、アムリッツァ後、ヤンは密かに、自派の戦略目標を変更するべきと考えていたのだろう。それは、帝国の内戦、即ちリップシュタット戦役を最大限利用して、同盟が帝国を打倒する事。いや正確に言えば、同盟軍の介入で、帝国の内戦を長期化させて、帝国各地の領

主貴族らを独立させる。帝国を数多の小国家、小集団に四分五裂させ、銀河帝国を国家としては滅亡させる。その結果、同盟は帝国の圧力を受ける事が無くなり、対帝国戦争は事実上、終結するのだ。

これがヤンの描いた構図だった。故に、自分がブラウンシュヴァイク公とのチャンネルを用いて、帝国の内戦に介入すれば、銀河帝国は滅亡すると、ヤンは確信できたのだ。それは、開祖ラインハルト陛下が強大な軍事力を用いて、貴族連合や同盟を討滅したような形ではなく、敵国を分裂させて、国家として機能させなくする、極めて消極的な形での「滅亡」だったが、低下しきった同盟軍の戦力では、このような形しか志向できなかったのだろう。ヤンはこと政略・戦略においては、ヒロイックさなど欠片も無い、極めつけのプラグマティストでリアリスト、さらにマキャベリストだった。

ヤンは弱体化した同盟軍では、ラインハルト陛下が率いる帝国正規軍、そしてブラウンシュヴァイク公が盟主を務める貴族連合軍、どちらとも正面切って戦っては、到底勝つ事は出来ないと見切っていた。故に、両者を戦わせ、徹底的に疲弊させて、漁夫の利を占める事、それがヤンの基本戦略だった。

そう考えると、この時にヤンが求めていた事が理解できる。ヤンには、帝国の内戦に対して、自らが持てる最大の戦力を率いて、最も効果的な時期に介入できる地位と、介入に際して、自らがフリーハンドを行使できる立場が必要だった。

そのため、帝国との国境線に位置して、雷神の鎚という絶対兵器を備える難攻不落の堅城、かつ自給自足も可能な補給基地でもあるイゼルローン要塞、そして旧第１０・第１３艦隊を合したヤン艦隊、この二つを自身の完全な支配下に置き、かつ最も効果的なタイミングに、最短時間で帝国に侵攻できるように、イゼルローン要塞司令官兼駐留艦隊司令官の地位を求めたのだ。

だが、その地位を得ても、軍司令官の独断で軍隊を動かす事は重大な国法違反だ。それはシビリアンコントロールを掲げる同盟では、帝国以上の桎梏となって、ヤンの両手両足を縛った。まして、アムリッツァの大敗からまだ日が経っておらず、この時点での帝国再侵攻は、

例え内戦に乗じるためとの名分があっても、世論の賛同を得る事は難しかった。

よって、自らが艦隊を率いて、イゼルローンから出撃できる名分がヤンにはどうしても必要だった。一度出撃してしまえば、細部の運用は軍司令官の裁量による部分が大きくなるからだ。反戦派勢力にも有無を言わせない名分が1つだけある。それは「市民の生命と財産を守る」ため。即ち、反政府勢力、クーデター勢力の鎮圧だ。

故に、ヤンはラインハルト陛下の策謀を看破しつつも、自分がコントロール出来る範囲内で、敢えてクーデターを起こさせたのだ。その鎮圧を名目に艦隊を出撃させて、クーデター鎮圧後、返す刀で帝国領に侵攻、リップシュタット戦役に介入する事こそが目的だった。ミンツ氏の著作では、フォークの凶弾で負傷したクブルスリーに代わり、統合作戦本部長代行になったドーソンは、ヤンへの妬み嫉みから、同盟領内の4ヶ所で蜂起したクーデター勢力を全て鎮圧せよ、との命令を出したと、ドーソンが私怨でヤンを酷使しようとしたとの見方をしているが、ヤンの目的が出撃後のフリーハンドを得る事だったとするならば、むしろ攻略目標が広範囲であればあるほど、行動の自由が得られて望ましかった。故に、ヤンの意向を密かに伝えられたトリューニヒトが、国防委員長ネグロポンティを介して、ドーソンに命令させた、ヤンの自作自演だったと考えられる。

いや、首都星ハイネセンまで進撃した後、イゼルローン要塞に取って返して、さらに帝国領に侵攻するなど不可能だと言われるだろう。確かにその通りだ。しかし、それは史実に幻惑された見方である。

前述した通り、ヤンの目論見は、自身がコントロールできる範囲内でクーデターを起こさせ、自艦隊を出撃させる大義名分を得て、リップシュタット戦役に介入する事だった。以下、節を改めて、ヤンは同戦役に介入後、どのように銀河帝国を「滅亡」させようと考えていたのか、再度、その点を詳細に論じてみたい。